

はしがき及び凡例

本書は小山田与清著『松屋外集』のうち、初編二〇卷、二編七卷からなる系統の伝本を翻刻、校合して研究者・江湖好字の志に提供するものであり、巻一に続いて巻二を刊行する運びとなった。また、訓点や捨て仮名なども完全には一致せず、伝本研究の進展を今後に期すこととした。この翻刻では国会図書館本を底本として、もりおか歴史文化館本（1499）を対校本文として採用した。もりおか歴史文化館本には南部家旧蔵の『松屋外集』が他に写本二部、刊本一部が存在している。底本、対校本文については巻一のはしがきで示した程度のことしかまだ分かっていないが、小さくない異同をもつ項目もある。

翻刻の凡例を説明する。まず冒頭に私に内題と目次を示した。目次は項目番号と頁数で示した。内容は次頁以降の本文中の目次を参照されたい。翻刻は国立国会図書館本の本文に従い、字取り、返り点、捨て仮名字も忠実に翻刻するようにとめた。割書については原則へに本行と同じ文字サイズで示し、割書内の返り点も翻刻した。字形が不明瞭な字やUnicodeで定義のない字形、使用フォント(Brami明朝)に割当がない字については通行字体を利用した。行頭の筆の尻による圏点は「○」。和歌に付された庵点は「ゝ」、踊り字については字形を参照して「ゝ」「々」を、改丁については表裏ともに『』を付した。丁数は墨附丁数と表裏の別を漢数字で示した。校合に際しては本文異同が認められる場合に異同を示し、アラビア数字の文末脚注を付す形で位置を示した。捨て仮名・返り点の異同も大きいが無視した。

対校においては、もりおか歴史文化館本（1499）を「も」として、かぎかっこ内に直前の文字との異同を示し、対校本文にその文字がない場合は「ナシ」と記し、底本にない文章が挿入されている場合には（追加）を末尾の線以降を校勘記として付している。長文の入れ替えが生じる場合には底本の本文と「Ⅱ」で対校本文の入れ替えを示したが、巻二にはそういう事例はないようだ。対校本文の提示は底本

と同じ基準で示したが、改丁については省略した。国立国会図書館本に見られる朱点などについても脚注で示した場合がある。南朝系図はいずれの伝本も朱で単線が引かれるが、印刷の都合で墨線とした。また、系図を完全に再現することは難しいので、親子関係が分かるように若干字取りを変更している。なお組版における問題により、一部返り点やカーニングに位置ずれがある他、準假名が底本と変わっている。たとえば振り仮名中の「ㄱ」などの略字は「コト」で開くようにした。捨て仮名に使われる「也」はなるべく漢字で再現した。一部は漢字で示さざるを得ない箇所もあった。附属のCDには本文データ及びフィールドコードを除いたテキストデータをも付した。巻一とは行詰め字詰めが異なることを含め、丁数表記を漢数字に変更するなど体裁が異なる点もあるほかいくつか変更がある。ご寛恕を願う次第である。書名や人名の検索には便利かと思う。翻刻の許可を頂戴したもりおか歴史文化館に深く御礼申し上げる。なお、本書はJSPS科研費JP22K13040、JP21J00181の成果である。

令和六年三月十一日 梅田 径 記

翻刻

松屋外集

卷二

目次

目録 1頁

第十六	第十五	第十四	第十三	第十二	第十一	第十	第九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
6 2 頁	5 6 頁	4 9 頁	4 1 頁	2 5 頁	2 0 頁	1 9 頁	1 3 頁	1 2 頁	1 1 頁	1 0 頁	8 頁	8 頁	6 頁	6 頁	3 頁

校勘記	第三十	第廿九	第廿八	第廿七	第廿六	第廿五	第廿四	第廿三	第廿二	第廿一	第二十	第十九	第十八	第十七
9 3 頁	9 2 頁	8 8 頁	8 5 頁	8 4 頁	8 3 頁	8 3 頁	8 3 頁	8 2 頁	8 2 頁	8 1 頁	7 9 頁	7 4 頁	6 9 頁	6 4 頁

松屋外集 二（外題）

（一丁空白）

松屋外集卷之二

目録

第一 おほよそ衣

いざとほし ゆきのよろしも 肩ぬぎ

第二 しらさ雲

小雲

第三 よろこぶ雲

慶雲 喜雲

第四 ゐのこ雲

第五 みづまさ雲「一才

黒雲 魚鱗雲

第六 鵲の鏡

第七 梁塵

第八 白木綿シラユフ幣ミテクラ

木綿ユフ麻アサ栲タク 四手シデカタソギ
荒妙アラタヘ和妙ニキタヘ玉串タマグシ

千木氷木チキヒキ

第九 強盜熊坂長範

第十 郢曲エイキョクヒトヨ一節切尺八中啓キリシヤクハチチュウケイ

第十一 經房遺書考

第十二答荒木田久守南朝系圖「一ウ

津嶋天王社^一

第十三宰相大將

参議 非参議 八座^{ヤヅラ} やくらの司

もろゆき

第十四いわちどり

いわけ いわけなき つゞは小^{チヒサ}きをいふ

長渚の濱 名草の濱 千鳥

第十五哆^タ嶂^{ギマ}摩知^ヂ

尔^ニの意^イの乎^ヲ 与^ヨの心^{シン}の乎^ヲ

大坂山口 がてんかも 當^{ダイ}麻^マ「二オ

第十六さいで

しまく入道

第十七うらわかみ

第十八答屋代弘賢之問

おほあらき おほあらきの里 おほあらきの杜

大荒木の駒 夜半^{ヨハ} ふし原 ふしづけ

しば原 とわたる けこのみわもり

第十九答磐瀬醒之問

足袋 皮足袋^{カハタビ} 木綿足袋^{モメン} 絹足袋^{キヌ}

金抄^{キンシャウ}の誓言^{セイヤゴン} 馬鹿者^{バカモノ} 天守 繪馬「二ウ

六十六部回國の経聖 木から落た猿

第二十答椿仲輔問

比滿沙伎理ヒマサキリノヤナ 築キナ えりさす 都婆波ツバハ

山都婆波ヤマツバハ 小都婆波コツバハ 等呂須伎トロボスキ

下総豊田郡

第廿一くがにあがれる魚

第廿二歌道の養子

第廿三つくり丘

第廿四野井

第廿五哉の字」三才

第廿六壽の假名

第廿七等身の佛

第廿八更級日記

第廿九雞頭花ケイトウゲ

矮ナシケンクイトウ 雞冠トリカノリ 雞冠菜2

第三十いしく

(四行空白) 三ウ

松屋外集卷之二

武蔵多西 平小山田與清 稿

越後高關 平澁谷永田保 訂

第一おほよそ衣

○古語拾遺に仍就^ニ於^テ倭^ノ笠縫^ノ邑^ニ殊^ニ立^ニ磯城^ノ神籬^ニ奉^リ遷^ニ

天照大神及草薙^ノ劍^ヲ令^ニ皇女豐鍬入姫^ノ命^ニ奉^リ齋^ニ焉^ニ其^ヲ

遷祭^ノ之^ヘ夕^ニ宮人皆參^リ終夜宴^ヲ樂^ニ歌^ヲ日美夜比登能於^ニ

保與須我良^ノ爾伊佐登保志由岐能與^ニ呂志母^ノ於保^ニ

與須我良^ノ爾自注^ニ今^ニ俗歌^ノ日美夜比止乃於保與^ニ

曾許呂茂比佐止保志由伎乃与侶志茂於保与曾^ニ四才^ニ

許呂茂詞^ノ之轉^ヲ也按^ニ二美夜比止^ノ乃^ニ宮人^ノ之^ヲ於^ニ

保与須我良^ノ爾ハ大夜過^ニ乍^ニ尔^ニ也^ニ大ハ宴^ノ樂^ノの夜^ノ

盛事をほめて大夜といふ豊樂の豊におなし伊

佐登保志は率通也率を伊佐とのみいへるは伊

豫の伊佐庭などの例いとおほかり通は徹夜^ノの

意にて夜一夜寐すしてうたけし徹す也俗に夜

通し立通し起とほしなといふもおなし萬葉集

へ十の卷に居明し今宵は飲んとよめるもまた徹夜^ノ

乃義也由伎能与呂志母は行の宜母にも母は助

辞也行は常夜行來經行などの行におなしくて」四ウ

時刻の移るをいふ神樂歌に鶏は鳴とも歌遊て

ゆかななといへる行もおなし宮人^ノが^ノ大終夜に

率^ノ起居^ニて宴樂^ヲし時刻の移行^ヲかおもしろくよろ

しきとなり此哥の解を神樂哥の注古語拾遺の

注などにおろくいへるはいとまさしき考とも

にて取^リ用^ユるに足^ルす又俗歌といへる方の於^ホ保^ホ与^ヨ
曾^ソ許^コ呂^ロ茂^モは大装^{オホヨソ}衣^{コロモ}比^ヒ佐^サ止^ト保^ホ志^シは膝^{ヒサト}通^{ホシ}にて欄^{スソツ}著^ケ
衣は膝の下に裔^ヒいと長^{ナガ}ければなりと賀茂翁の
いはれし説よろし由^ユ伎^キ能^ノ与^ヨ呂^ロ志^シ茂^モはその衣を
着^キて行^{ユク}貌^{モウ}のよろしきといへるを由^ユを誤^{アヤマ}として」五才
神樂に支^キ乃^ノ与^ヨ呂^ロ之^シ毛^モ与^ヨと改^カたるに据^{ヨリ}て著^{シテ}の宜^{ヨシ}
きなりと賀茂翁いはれたれと古語拾遺の諸本
いつれも由^ユの字なれば舊^{キウ}に従^{したが}ひて妄^{ミダリ}に改^カむへ
からず神樂哥^{オホヨソノコロモユキ}の方にては着^キの宜^{ヨシ}母^モと心得^{ココロ}るか
よし大^{オホ}凡^{ヨソ}衣^{ヨソノコロモ}雪^{ユキ}の宜^{ヨシ}もなといふ説はいとうけか
たし夫木抄^{オホヨソノコロモユキ}へ冬部三^{フユノミ}に天仁二年十一月家歌合神樂
藤原盛仲^{フジワラノモリナカ}は宮人は神のいさむるうれたさにおほ
よそ衣ぬきそみたるゝ此歌の心は神の禁^{イサ}制^サむ
る慨^{ウレハシ}さに大装^{オホヨソ}衣^{コロモ}をぬきみたるといひて肩^{カタ}を脱^{ヌケ}
乱^{ミダレ}舞^{マフ}貌^{サマ}を神の禁^{イサ}にてすきかましきわさせられ」五ウ
ねは心の乱^{ミダレ}たるによせていへる也宮人は舞^{マイ}人^{ヒト}
也千五百番歌合嘉陽門院越前か哥に櫛^シとると
よ宮人の神あそひともよめり神のいさむるう
れたさは神の制^{イサ}止^メ給^メふかうれはしきと也伊勢
物語に恋しくはきてもみよかしちはやふる神
のいさむる道ならなくといふとうらうへ也

ぬきそみたるゝは舞人の肩カを脱スみたるゝことに
て五節コセテの肩脱カタスなどいふこともあり夫木抄へ冬三に三
嶋社に奉りける神樂をしらていふ哥宮人権僧
正公朝　ゝ霜のうへに雪をかさねて宮人のおほ」六才
よそ衣オホヨソさえあかしつゝ此哥の心は宮人の大装
衣コロモの霜雪にさゆるよし也さと宮人振といふ名
はやく古事記、允恭の段にも見えたりき

第二しらさ雲

○夫木抄へ雑一〳或抄古哥しらさくもよみ人しらす
ゝ天のはらよきりわたるしらさ雲月にもまか
ふはやくけねかし此しらさ雲ものにをさく見
えず此哥の心によれば白小雲シラサクモの心にや月の夜
ちきれたるしら雲のあるか月にもさはりてま
かはすへければはやく消キエよとよめるなるへし」六ウ
小を佐サといふは三樹考に例を挙たれば関ミて知
へし小雲の字も詩薈ケ兮蔚ウ兮の箋に薈蔚之小雲
不レ能レ為二大雨一と見ゆ

第三よろこふ雲

○千五百番歌合に土御門内大臣ゝもろ人のあふく
のみかは君か代は空によろこふくもゝありけ
り此哥夫木抄へ雑一〳にも載たり按によろこふ雲は

慶雲也卿雲慶雲など相通^{アヒカヨ}はして書けり續日本

紀へ三の卷へ類聚國史へ百六十五の卷へなどにみえ延喜治部式

大瑞の条に慶雲^ハ狀若^{ニシテ}烟非^ス烟若^{ニシテ}雲非^ス雲と注^{シル}され七才

たり史記天官書に若^{ニシテ}煙非^ス煙若^{ニシテ}雲非^ス雲郁々紗々^{トシテ}

蕭索綸困^{アリ}是謂^ニ卿雲^ト見^ニ喜氣^{ハス也}也注に正義曰卿

音慶云々漢書天文志の説亦おなし同書礼樂志

に甘露降^リ慶雲出^ツ云々晋書天文志中に瑞氣一曰^ニ

慶雲^ニ若^レ煙非^レ烟若^レ雲非^レ雲郁々紛々蕭索綸困是謂^ニ

慶雲^ニ亦曰^ニ景雲^ニ此喜氣太平之應云々などもあり

源氏藤裏葉の卷の河海抄咲花抄提要目安湖月

抄如菴説などに紫雲を慶雲なりともいへり韻

府に鷗陽詹德勝^カ序を引て膳^ニ歡心^ヲ揚^フ喜雲^ト見え

たる喜雲もよろこふくもと訓^{ヨム}へし藝文類聚へ一の七ウ

卷天部へ雲の条に孫子瑞應圖曰景雲^ハ太平之應也^ニ

曰非^フ氣非^フ煙^ニ五色紛縕^ス謂^ニ之慶雲^ト云々同書へ九十八の卷祥

瑞部上へ慶雲の条にも挙て紛縕を氣氤に作る又景

雲卿雲などの故事をも載す武備志へ百六十一の卷占度載へ

占雲氣の篇に瑞氣^ニ一曰慶雲^ハ若^レ烟非^レ烟如^レ雲非^レ

雲郁々紛々蕭索綸困是謂^ニ慶雲^ト亦曰^ニ景氣^ニ此喜氣^也

也太平應云々管窺輯要へ五十六の卷へ瑞氣の条に一曰^ニ

慶雲^ニ一曰輕雲^ハ若^レ烟非^レ烟若^レ雲非^レ雲郁々紛々蕭索

輪囷是日慶雲^ニ曰^ク景雲^ニ此喜氣也太平之應^也一曰^ク
昌光赤如^ク戢⁴狀^ル聖人起而受^ル命則見^ル云々なども見^ル八才
ゆ此外挙にいとまなし

第四ゐのこ雲

○夫木抄へ雑一源仲正家集ゐのこ雲の哥に雲はらふ
月の光におひにけりはしりちりぬるゐのこ雲

かなこは鶴林玉露へ十五の巻范石湖占雨詩に飛雲走
群羊停雲浴三豨云々武備志へ百六十一の巻占雲氣一氣之戰
陣の条に軍行有^テ白雲^ニ如^ク猪^ル來臨^{スル}者大驚^也宜^ハ備^フ云々

またへ百六十二の巻占雲氣^ニ氣之軍敗の条に軍上氣中有^ニ黑
雲^ニ如^ク羊形^ニ或如^ク猪形^ニ者此尾解^ル之氣軍必敗^ル云々また

軍上氣如^ク群羊群猪^ニ在^ル氣中^ニ此衰氣^也擊^{テハ}之必勝^{云々}八ウ
管窺輯要へ五十三の巻雲氣不祥占に白雲如^ク猪^ル所^ル當^ル軍

夜須^ル警備^ル軍驚之兆^也云々またへ五十四の巻將軍氣の条
に或如^ク群猪^ニ在^ル霧氣中^ニ皆衰氣^也云々またへ五十五の巻

如^ク群猪^ニ在^ル於氣中^ニ為^ル敗軍^ニ云々晋書へ天文志中へに黑氣如^ク
壞山^ニ墜^ル軍上^ニ者名曰^ク營頭氣^ニ或如^ク群羊群猪^ニ在^ル氣中^ニ

此衰氣也云々など猪雲の名からくに^流もきこ

えたれは本朝にもさる名ありしなるへし

第五みつまさ雲

○慈鎮和尚の拾玉集へ四の巻百首歌の中にすゑはれ

ぬ水まさ雲にもる月を空しく雨のよはやおも」九才
はん此哥夫木抄へ雑一」にも水まさ雲と題して収た
り写本には水まさ雲ともあれと藻汐草にもみ

つまさ雲とあれは多本に従へしこは水増雲の

義なるへし為尹百首に夕立早過へ夕立の水まさ

雲のはや過て涼しくうかふみかの月かけ一本

には水ます雲ともあり周礼へ廿六の卷宗伯礼官之職へ保章氏

以三五雲之物一辨一吉凶水旱降農流之祲家云注に

鄭司豊公雲色黒為水云と升菴外集へ二の卷へ望氣經

の条に黒雲多水云々晋書へ元文志中へに雲甚潤而厚大

雨必暴至四始之日有黒雲氣如陣厚大重者多雨」九ウ

云と古徴書へ十の卷へ春秋感精符に冬至日見黒雲有

水云と武備志へ百六十一の卷占雲氣一へ氣之戰陣の条に凡安

營有黒雲如鳴鶏状与營門相對宜移營高阜天必

大雨河水泛漲防有沈溺之患云と管窺輯要へ卅六の卷壁宿

雲氣干犯占に黒氣入壁有破國凶一曰有大水云

云など見え同書へ五十四の卷へ風雨の条萬用正宗へ一の卷へ

天文門などにも黒雲必雨よしありこれを水増

雲といふへし本間游清日豊前小倉の藩士秋山

光彪語けるはこの大江戸にて鰯雲といひて魚

鱗の形せる雲をわがすむあたりにては水まさ」一〇才

雲といへりと語れり又仲田顓忠ぬし語られし
は先年江島へ行とて程谷驛に宿かりし時宵は
雨ふりて曉方に雲間の月ほのかに出たりこゝ
にあひやとりせる飛脚の有けるが壁をへたて
て人に物いふを聞は今宵は水まさ雲にて月が
明らかならぬといへり立のいそぎに其飛脚は
いづこの人とも問正さず水まさ雲の義⁸をもた
つねもらして今に口をしといへり今其夜のさ
まを思ひやるに慈鎮和尚の水まさ雲にもる月
をとよみ給へるによくかなへるやう又此兩人「一〇ウ
の話をもて考ふれば水まさ雲といへる名今世
もかたゝに有とみえたり猶俟^二後考^一云々按に淮
南子覽冥訓水雲魚鱗とあるは此いわし雲の説
にかなへり

第六鵲の鏡

○夫木抄〈夏三〉文永十年毎月一首中民部卿為家へか
さゝきの鏡の山の夏の月さし出るよりかけも
くもらす同書〈秋四〉家集月歌中為家卿天のはら
ひかけさしそふ鵲のかゝみとみるは秋のよの
月同書〈雑二〉御集慈鎮和尚かさゝきの鏡の山の「一一才
夏の月さし出るよりかけもくもらす按に此哥

新拾遺（秋下）にも家十五首哥に月前大納言為家とて載たれは慈鎮和尚の哥とせるは誤也鵲の鏡は月の異名也唐李嶠か月詩に桂生三五夕莫開二八時分輝度鵲鏡流彩入蛾眉云々王維か清如玉壺水詩に曉浚飛鵲鏡宵映聚螢書云々李白詩に明々金鵲鏡了々玉臺前云々王勃上皇甫常伯啓に鸞鑣就路駕駿相懸鵲鏡臨春妍嬾自遠云々と見えたるにて知へし

第七梁塵 一一ウ

○次郎百首笛藤原仲實吹たつる笛のしらへの聲きけはのとけきちりもあらしとそおもふ此

哥夫木抄（雑十四笛部）にも載たり土左日記に又ある人にしくになれとかひうたなとうたふかくう

たふにふなやかたのちりもちりそらくゆく雲も

たよひぬとそいふなる云々列子湯問篇に薛譚

學謳於秦青未窮青之技自謂盡之遂辭歸秦青弗止餞於郊衢一撫節悲歌聲振林木響遏行雲薛譚

乃謝求反終身不敢言歸秦青顧謂其友曰昔韓娥

東之齊匱糧過雍門鬻歌假食既去而餘音遶梁欐

三日不絕左右以其人弗去過逆旅人辱之韓娥因曼聲哀哭一里老幼悲愁垂涕相對三日不食

娥因曼聲哀哭一里老幼悲愁垂涕相對三日不食

遽^{ニハカニ}而^レ追^{オヒト、ム}之^ヲ娥^ハ還^タ復^テ為^ニ曼聲長歌^ス一里老幼喜躍^シ扑舞^シ
弗^レ能^ハ自^{タフル}禁^{ルコト}忘^ル之^ニ悲^{サキ}也^ハ乃^レ厚^シ賂^{ユカシム}發^シ之^ニ故^ハ雍門之人^{マデ}至^{マデ}
今^ニ善^{スル}歌^ハ哭^{ナラヘ}效^{ル也}娥^カ之^ニ遺^{サレ}聲^{コト}云^ニ此^ハ說^メ博物志^ニへ八^ノ卷^ノ史^ニ補^フ
篇^ニにも出^テ餘^リ音^ヲ遶^メ梁^ニ欄^ニ三^ニ日^ノ不^レ絶^ス之^ノ欄^ノ字^ヲなし梁^ニ
欄^ハはうつはり也^{ナリ}劉^ニ子^ノ精^ニ神^ノ篇^ニ注^ニに韓^ニ娥^ノ善^ニ歌^ニ欲^ス入^ル

齊^ニ唱^ス歌^ハ行^キ至^リ雍^ニ門^ノ值^フ雨^ニ雪^ニ糧^ニ盡^ス欲^ス歌^フ乞^フ食^ヲ雍^ニ門^ノ人^ハ不^レ

識^レ以^テ杖^ヲ擊^ツ之^ニ韓^ニ娥^ノ遂^ニ悲^ス哭^ス雍^ニ門^ノ人^ハ聞^ク其^ノ哭^ノ聲^ヲ皆^ハ悲^シ泣^ス
三^ニ日^ノ為^ニ之^ノ不^レ食^ス有^リ智^者謂^フ娥^ハ日^ヲ既^ニ善^ニ歌^シ可^シ停^テ哭^テ而^レ一^ニ二^ニウ

歌^ハ韓^ニ娥^ノ即^チ唱^ス歌^ハ其^ノ歌^ハ清^ニ暢^ニ可^シ動^ス梁^ニ塵^ヲ雍^ニ門^ノ人^ハ聞^ク之^ヲ又^ニ

三^ニ日^ノ忌^ミ其^ノ食^ヲ也^{ナリ}云^ニ藝^文類^聚へ四^{十三}樂^部三^ノ歌^部に劉^ニ向^ノ

別^ニ錄^ニ曰^ク有^リ麗^人歌^ハ賦^ヲ漢^ニ興^シ以^テ來^ニ善^ニ雅^歌者^ハ魯^人虞^公也^{ナリ}

發^ス聲^ヲ清^ニ哀^ニ蓋^ス動^ス梁^ニ塵^ヲ云^ニ同^ニへ四^{十四}の卷^ニ樂^部四^ノ箏^部梁^ニ簡^文

帝^ノ箏^賦に使^ム長^廊之^ノ瓦^ヲ虛^ニ墜^シ梁^上之^ノ塵^ヲ染^{キヌ}衣^ニ云^ニ杜^ニ

氏^ノ通^典へ百^四の卷^ニ樂^五歌^ノの条^ニに有^リ漢^ニ有^リ虞^公善^ニ歌^シ令^メ梁^上

塵^一起^シ云^ニと見^エえし梁^ニ塵^モ共^ニに餘^リ音^ヲ達^ル梁^ニ欄^一に

起^ル語^也本^ニ朝^ノの古^ニ書^ニに梁^ニ塵^秘抄^ニ梁^ニ塵^秘抄^口

傳^ニ集^ニ梁^ニ塵^愚按^抄なと名^ツけ古^ニ文^ニにおほく韓^城¹⁰

之^ノ塵^ト書^ルものみなこれ^ヲ据^ロとす^一一^ニ三^ニ才^ノ

第^八白^木綿^幣四^手カ^タソ^ギ

○木^ユ綿^フハ穀^カ木^チノ皮^ヲ剥^ハテ晒^サシタル^ヲ云^フ穀^カ木^ハ紙^ニ

ニスクカウゾト云^フ也^{ナリ}梶^カ葉^ハノ紋^モナドモ此^ノ木^ノ葉^ニ

ノ形ヲ取レル也其色白キユエ白木綿ト云此ヲ
 布ニ織ハ最柔ナルユエ柔抄ト云ニキハ柔ナル
 事タヘハ約テトモイフサイデナト云モ裂布
 ニテ細ニ裂タル布也キヲイト云ハ音便也然レ
 バニギテト云ハ柔妙ノ約談白ニギテト云ハ白
 木綿モテ織タル柔布ト云フ事也此ヲ神衣ノ料ニ
 奉リ又白木綿ノマヽニテモ奉ル也又サト云モ「一三ウ
 此妙ヲ細ニ切テ神ニ奉ルハコロモヲ手向ル義ニト
 レル也又サハ禱麻也ネギヲ約テヌト云ヒフサ
 ヲ省テサト云古語拾遺ニ麻謂之総ト見ユ神ニ
 請禱トテ奉ル麻ノ心也其衣ハ木綿ニテモ麻ニ
 テモ織レバ通ハシテイヘル也又青和手トハ麻
 ハ木綿ヨリモ色劣リテ青ケレバ麻モテ織タル
 柔布ヲ云也柔妙ニムカヘテ荒妙ト云ハ荒ク織
 タル布也ユフト云名ハ物ヲ結モノナレバ也又
 タクト云栲繩栲綱ナドモ云ハ手繰義也麻ニモ
 木綿ニモ涉リタル總名也後世ハタグルト濁テ「一四オ
 イヘド古ハ清テタクルト云ル也
 ○弊ハ滿座ニテ座上ニ充滿セシメテ奉ル義坎又
 ハ手ニ持テ座ニ備ル義ニテ御手座物坎又ハ手
 向座ニテ御手向座物ノ義坎トマレカクマレ座

上ニ満備ヘテ奉ル物也座トハスベテ物ヲ置ク
処ヲ云倉モ物ヲ置ク家也馬鞍ハ人ヲ乗セオク
処也位ハ人ノ就テ居ル処也サレバミテグラノ
クラハ物ヲ滿テ置ク処ニテ臺ナドヲ云ベシ後
ニ幣束ヲミテグラト云ハ上古櫛ニ木綿ヤ玉ヤ
鏡ヤクサノ物ヲ付テ手向種ニセシヨマネテ」一四ウ
紙ニテ作り轉リテハ金銀、幣ナド云モ出来タル
也太玉串ト云ハ太ハホメタル詞タマクシハ玉
ヲツケタル串坎又ハ手向種¹³手向串坎此モ臺ニ
充テ奉ル由ニテミテグラトハ書ル也

○木綿四手ハ木綿ハ前ニイヘル如ク穀木ノ皮ヲ
剥テ晒シタルニテ今ノ苧ヨリモ色白キ物也四
手下垂シヅタレノツヲ省キタレヲ約テテト
云シタリ柳シタリ尾ナドノシタリモ下垂也下
ヲシヅト云ハ下枝下情ナト例多シ又省テシト
ノミ云ハ高倉下ヲカクラジト云類也上古櫛」一五オ
ニ木綿玉鏡ナド付テ弊ニセシヨリ神ニ木綿付
タル櫛ヲ太玉串トテ奉リ後ニハ木綿ヲ紙ニカ
ヘテ櫛ニ付ケ或ハ櫛ナラヌ竹ナドニ挟テ木綿
四手トモ幣束トモ云フ事トナリヌ又左繩ナドニ
付ル紙モ木綿ヨリ思ヨリタルニテ木綿下垂ノ

義ナリ

○カタソギハ宮柱ノ屋根ノ千木ノ片方殺タルヲ
云、千木亦ハ氷木トモ云リ、ヒデ肱ノ如ク組合セタル
木ナレバ、ヒデ肱木ナルヲ上ヲ省テハ千木下ヲ省テ
ハ氷木ト云也、カヤ葺ノ屋根ノ押ヘニ前後ノ軒
ノ端ヨリ頂上マデ木ヲ二本ヤリチガヘタル末
ノ長ク出タルサマヲ千木高領ナド云、モ千木高
ク、アラハ頭レタル家ニソコヲ領シ住義也、片ソギノ行
合ヌト歌ニヨメルモ木ヲヤリ違ヘシ上ノ前後
ヨリ行合処ヲ云、又風雅集二度會朝棟カタソギ
ノ千木ハ内外ニカハレドモチカヒハ同ジ伊勢
ノ神風トヨメルハ内宮ニハ内ヲソギ外宮ニハ
外ヲソグト云、後ノ定アルニ据レル也

以上略考四箇條所答平戸城主松浦¹⁴源瀨朝臣之
問也」一六才

第九強盜熊坂長範

○強盜熊坂長範といふもの美濃國赤坂の宿にて
夜討し牛若丸に討たれし事は烏帽子折、ウタヒ謡曲熊坂
ヒデ謡曲などに見えたれどもと作り物語なれば信
用べくもあらず此は義経記に陸奥の金商吉次
牛若をぐしてくだりけるに近江國鏡宿にやど

れる夜強盜仙道の大將出羽國人由利太郎越後
國頸城郡人藤澤入道信濃さんの権頭の子息
さんの太郎八代のごんの守遠江人蒲与一駿河
人奥津十郎上野人との岡源八など夜討してみ」一六ウ

なうたれ中にも藤澤入道大長刀にて戦しが遂
に牛若に討れしよし見ゆこれを翁の烏帽子折
草子に美濃國青墓宿にて熊坂のちやうはんと
いふもの、夜討せしよしに引直して作りたる
を謡曲はそれによりて又作りなほしたるもの
也されば熊坂長範は義経記の藤澤入道が事な
るを雑々拾遺に賀州熊坂太郎長範といふは藤
原氏なり武勇たくましかりしが後に盜賊の頭
となり近江の国鏡又は美濃路へ立こえ往來の
旅人をはぎとり世を渡るよししるせしはいみ
じき妄説也謡曲拾葉抄に異本義経といふもの
を引て熊坂張樊といふ盜は加賀國熊坂人なる
が美濃國赤坂宿にて夜討し牛若丸に討れしよ
し記せるもいとくうけがたし又張良の張の字
と樊噲の樊の字をとりて智勇を表したる名と
いへるもしひごと也烏帽子折草子にくまさかの
ちやうはんおやこ六人とも見え七歳のとしは

一七オ

じめて馬を盗みそれより強盜の大將軍となり
五人の子ども、各ぬす人のわざにかしこくて
世に横行せしよしなどあれば六十ばかりの翁」一七ウ

なりけんことおしはかられ烏帽子折、謡曲に六
十三といへるもさもおもはるゝ也然て長範
が年齢形粧などは義経記の藤澤入道がさまと
烏帽子折、草子烏帽子折、謡曲熊坂、謡曲など考て
押量べし○又按陸奥人熊坂邦子彦が文章諸論

に熊坂四郎長範の事を記して信州の名族とし
保元の役に左馬頭義朝に従て白川殿を攻奉り
しものとす又平氏の粟を食を恥て剽掠を業と
せしを伯夷叔齊が節に比したるなどみなしひ
て己か先祖とし其名をかゝやかさんための文」一八才

飾也家系譜牒は私の説を主張せるもあれば従
ひ用ひがたきはた少からず熊坂長範に子孫あ
りといふ事もいかゞあらん熊坂は地名にて相
模、國愛甲郡にも熊坂村あり又平家物語七の卷
北國下向の条に信濃と越後の境なる熊坂山に
陣をとると見え盛衰記、廿八の卷北國所々、合戦
の条同卅の卷平氏、侍共亡条などに熊坂とある
も同處ときこゆこはもと山の隈の坂の事にて

それに起れる名なれはさる地名諸国におほかるべくそこに住たる人熊坂を称号とせしもあ」一八ウ
またなるべければ熊坂氏必長範が子孫といはむもいかゞ也烏帽子折草子に据れば父子六人ことごとく討れたれば子孫なしといはんかたまさるべし又義朝に従て白河殿を攻奉りし熊坂四郎は名乗も傳はらねば長範也といふ證もなしされば金商吉次をおひやかせしといふ熊坂長範は作り名にて藤澤入道が前名なること義経記烏帽子折草子を考合せて知べし長範が事蹟實録にはたえて見えざるを強てありし人とせんはいかにそや續本朝通鑑六十二の卷にも俗「一九才説義経殺強盜熊坂長般及其從数人於赤坂」蓋与由利藤澤之事相謬傳者乎といへり緒論に邦乘を閱し野史氏を考といへるは俗書に己が闡推の説をくはへてかく古書に見えたり顔に書出しなるべしそは文辞のみを崇びて皇國の事實を疎におもふものおほかれば也藤澤入道を熊坂長範と改めしは當時藤澤氏にはゞかる人なとありてのわさにやさて牛若金商吉次末春に具して東國に下れるよしは平治物語三の巻盛

衰記四十六の卷同劔の卷などに見えたれと鏡」一九ウ
宿にて強盜を討し事は義経記を出處とす本朝
事蹟考に青野原といへる説はかたはらいたし
右強盜熊坂長範考所^ハ也^也答^ニ平戸侯隱居松浦静山君
之問^ニ也^一

第十郢曲一節切尺八中啓

○郢曲^{エイキョク}とは催馬^{サイバ}樂^{ラク}今^{イマ}樣^{ヤウ}朗詠^{ラウエイ}なにも歌謡の名
にて郢曲といふ一の謡物^{ウタモノ}あるにあらず徒然草
野槌に此辨見ゆ今世朗詠をうたふをのみ郢曲
と心得たるはひか事也さて朗詠の曲^{フシ}今^{イマ}樣^{ヤウ}の曲^{フシ}
神樂催馬樂風俗の曲^{フシ}の類呂律の声調各別なる」二〇オ
べけれど今の世の猿樂謡^{ウタヒ}と長唄^{ナガウタ}と相違^フかことく
はあらさるべし必竟は朗詠の曲^{フシ}にて新作の詞^{ゴトハ}
をうたひ作略^{サリガク}をも加^クへて今^{イマ}樣^{ヤウ}とはいへるにや
白拍子といふは拍子^{ハチ}とる名にて長門本^{ホン}平家物
語に白拍子をかぞへすまなどもあり此今^{イマ}樣^{ヤウ}
の舞^{ヒト}に一節切^{ヒトキリ}を用たるは古書にをさく見あた
らねど一節切は洞簫尺八の同属^スにて少しづつ
^{オモムキ}趣^{オモムキ}をかへたる也一節切の長一尺八分あるも尺
八の名に叶^{カナ}ひたり白拍子の作者信西入道が後
白川院に奏^{ソウ}奉^{ホウ}りし保元三年内宴を再興せるを」二〇ウ

り尺八をもつくり出て用たるよし続世継内宴の巻に見えたればよしあることにや寛永以後三

絃にあはせてふく一節切は宗佐高瀬タカセなどより

大森宗勲に傳はり宗勲その製作をも吹様をも

斟酌せしなるべし宗勲は和泉堺人にて紫の一

本に宗勲が切たる葛の葉風といふ銘の一節切

かとありそは紙鳶チユウヱイへ下巻元禄十二年刊本へ倭漢三才圖會へ十八

の卷樂器類部へ類聚名物考へ樂律部五へ雅遊漫録へ五の卷へなど考て

しらる尺八は和名抄へ音楽部へ源氏物語へ末摘花へなどに

出たればはやくより傳はれるを保元の比には「二一才

再興したる也また舞の中啓チュウケイを襟エリにさすことさも

あるへけれど古画などの證今とみに見出がた

し中啓はいにしへの蝙蝠扇カハキリにて源氏紅葉賀カハキに

源内侍が顔をおほひしこと見ゆ末廣スエヒロといふはた

これ也今の俗間の扇は檜扇ヒアフギの形に厚紙を折竹

骨を用て製れるにて寶の蝙蝠カワキリにはあらず出家

の一束一本とも束本イツソクイツホンともいひて厚紙一束へ十帖なりへ

中啓一本を臺に積ツミて礼式レイシキの進物にするも蝙蝠カハキ

にてこれ古代より男女出家すへて用ひし物也

右所シ答ル平戸隱居静山老候ニ之間「也」二一ウ

第十一 經房遺書考

○文政元年摂州能勢郡野間庄野村¹⁶民勘兵衛修理^ニ其^レ居宅^ヲ於^ニ梁上^ニ得^ニ古文一卷^ヲ同州池田里人山川正宣^ニへ俗称^ニ大和屋大三郎^ニ喜^テ而^ニ膳^ニ寫^シ之^ヲ記^シ其所由^ヲ於^ニ卷尾^ニ云^ク此建保中左少辨藤経房朝臣遺書無^レ疑也^ニ迺^テ別^ニ寫^シ二一通^一以^ニ一通^ヲ納^メ於^ニ能勢陣屋之帑藏^ニ以^ニ一通^ヲ納^メ於^ニ出野若宮八幅¹⁷祠中^ニ將^ニ傳^{ント}於^ニ不窮^ニ云^フ

○あまりをまりと書て十とせまりなとあるは賀茂翁〈真淵〉の文体にならへるにて建保の比の体に

あらず」二二才

○磨^{マロ}とあるも建保の比は丸と書たるがおほし近世の古学者磨^ハ麻呂^{マロ}満^{マン}など好^クて書^クことなり

○大輔判官といへる名目いといぶかしこは大夫判官をかくおもひ誤れるなるべし大夫判官は五位したる廷尉の嘉号なりまた郡司景家といふ名もいかにぞや

○御幸は院にまうす例にて西宮記北山抄などより後は必^ス主上^ニに行幸院に御幸と書こと也こはミユキとかイデマシとか訓^ムへく心得てみだりに書たるなり建保の世の人にかゝる誤はたえて」二二ウなし

○典内侍これはナイシノスケの事を俗にスケノ

ナイシといふより典の字をスケに當てみだりに書たる也典侍を音には清てテンシ訓には清てナイシノスケと訓例也

○舟をありそにつけなどいへるありそも荒磯の約語にて萬葉におほかりこれもなきさとか磯とか岸とかいふが中むかしのくちつきなるをや

○おもぶせしてはおもてぶせといふ詞よりさか二三オしらに思ひまうけし也

○おとゆふはをとほひの夕を省て古言らしくはなしたる也すべて古言は切約とおもへるにやへそりらがひまりげたはきゆく土手の西瓜の皮ですべるへうなりといへる狂歌さへふとおもひ出られていとおかし

○市女が笠てふものに似たると云てふといふ詞此外にも見ゆ文詞にはといふと書を歌詞には約てふとよみ万葉にはとふともちふともよめり古本神楽哥の詞書にてふとあるのみに二三ウて外の書にはをさく見あたらずさるを賀茂翁のともすれは何てふくと書れたるを見まねびてのわざ也建保の比にはふつになき事也

○主上を八宮とまうし〈安徳天皇也〉崩御の後若宮八幡

とあはせ御やまひ祭りければ云々こは若宮

八幡を由縁ありげにせんとての傳會妄作也又

あはせやまひ祭りといふも例の古めかしく

作り出たる詞也

○種長は君の来見クルミの御つくり哥を原にもて来見

権現とあかめ奉れりと云々〈原は地名也来の字今ひとつすべし〉二四才

こは上の文に十月廿四日はつ雪ふりて道にめ

なれし山々のいとめつらしくいつもの峰に御

幸ありて初雪をめてつ々こ々にクくる見れは

峯はきのふに似ずもありけり此峯を里人は来

見山あるはくるみが峰ともいふとあるうた也

これも望里なる来見権現といへる叢祠を所由

ありげにせんとてまうけ出し説なり

○従四位上侍従行左少辨藤原経房この位署いと

不審なり従四位上行左少辨侍従藤原朝臣経房

とあるべきことわりなりそは職原抄後附の位署二四ウ

式を見てもしらるゝにさるすぢもたどらぬも

のゝしわざ也又公卿補任辨官補任など考るに

経房は安徳後鳥羽などの朝に仕へて治承四年

に左中辨正四位下寿永三年に左大弁参木同年

九月に權中納言後に正二位大納言にも進たる
人也從四位上行左少弁といふこと無稽にて笑ふ

べし

○假名遣^{カナヅカヒテ}手^テ尔^ニ乎^ハ波^ハのみたりなるは山川正宣が跋

にもうけひきたるよしにしるし又経房といふ

人片田舎にさすらひて土民になり下り年さへ」二五才

おぼれての筆なればとて見ゆるしもすべしさ

れど其時代手尔乎波は正しかりしをかく誤べ

くもなく近世萬葉家といふもの出来て後の詞

つきなるもうけがたき證也古学へ萬葉家の類也は実に

千古卓越の道なれど片田舎人が賀茂翁本居宣

長などの著書をよみそれに心うつりて偏見固

陋にのみなりゆき道理をさとらざるはいかに

ともせんすべなしさる方か本やぶりの村学者

ぞかゝるえせごとしいでゝ世をあざむかんと

はすめるそは木曾義仲がおのれうましとおも」二五ウ

へる田舎料理を猫間^{ネマ}黄門^シに強すゝめけむにひと

しく鶯鳩が大鵬をわらへるがごとくなとにや

○山川正宣いみじくしんじて奥書せるはいかに

ぞや正信は本居宣長が門徒のよしきこえ仙足¹⁹

石碑の解をも著したればかゝるえせものにま

どふへくもあらじをなにゆゑにかありけむ知りてうけがひ顔したらんには学者の心にあらず不^レ知してしむじたらんには愚蒙のかぎりといふべしそもくの隆房の書を偽作せるよしはかの伊勢のわたりになま田舎学者ありてその「二六才里の叢祠をたふとげにいひなし己が家系などを世にあら²⁰さばやとおもへる愚癡心に起れる也さるは深田源内が大系圖を偽作し駿河志豆波多の社官が類聚国史の寫本に己が仕^ツる社を總社のよし書加^ヘて世を欺^キたる類也具眼の学者一觀せばいかにつくりかまふるとも忽にその偽を見あらはしつべきを管見固陋の心より猿丸^{タケノコ}が筭^{ヌスミケデキ}を盗折^{オノミ}て己^{フタタケ}が耳を塞ごときわざするぞをかしきや

第十二答荒木田久守南朝系圖「二六ウ

○尾藩儒官秦氏及津島^{ミヅノ}宮司氷室氏などより尋問としてその問書の文をもて御問の条左に御答申候

○南朝紹運録は天野信景が手より出候ものにて古本を以て増訂せし書なり後に大和人竹口栄齋増補して一書とす悉委しといへども正史に

對^{ムカヘ}考ればなほ牽強傳會なきにあらず

○宗良親王の御子尹良親王及御孫の良王の御事は浪合記の外所見なし新葉集李花集信濃宮傳などに見えて北朝にとらはれ給ひ年経て後永」二七才

和三年九月京にて薨じ給へるは宗良の御長子興長親王と申て母は狩野介貞長女也尹良親王は興長のさし次^{ツギ}の御弟にて母は知久四郎左衛門尉敦貞が女とも又は井伊介道政が女ともいへり尹良をユキヨシと訓は尹は廣韻に進也と注したればユキとよみしなりされど姓名録抄拾芥抄宗二が節用集新撰類聚往来伊呂波字類抄などに太^タと訓てユキと訓たる例なければなほ太^タと訓んかたしかるべくや良は右の書ともに与^シ之とよみ拾芥抄には羅ともよみたれ」二七ウ

ど後醍醐天皇の御子の御名の仮名^{カナ}に書たるものにみなよしとあればこれもたゞよしとまうすべくおぼゆ浪合記も天野信景が手に書候へば彼か増訂など候はむ坎極なし²¹とは申かたく候

○日本史菊池武光が傳に菊池武朝申状を引て將軍宮とするされしは征西將軍宮懷良の御子良宗にて母は武光が妹也貞治二年誕生菊池北朝

降参の後人臣に列し後醍醐院越後守良宗と名のり九州に漂泊して死去のよし後醍醐系図に見ゆ懷良は後醍醐天皇第十四の御子にて後村上二八才院のさし次の御弟也明史名山藏などには良懷とあり

○天野信景塩尻一の巻に尾張津嶋牛頭天皇祠社

傳欽明天王元年鎮座云々へ不見日本紀牛頭天王名此時未有改

曆雜事記聖武帝天平五年吉備飯朝於播磨逢牛

頭天王廣峯社記及峯相記同之按續日本紀無此

說吉備津嶋社記嵯峨帝再建云々へ日本後紀類聚国史等無下建牛

頭天王祠事當時天疫多然亦無祭牛頭天王說清和帝貞觀十一年以津

嶋天王勸請山城國祇園社三代實錄無此說二十

二社註式及改曆雜事記峯相記廣峯古證文皆以二二八ウ

播州飾磨郡廣峯牛頭天王為京師祇園本祠九國

史無牛頭天王之事然則中世以後所祭坎東鑑見

尾州津嶋社名と見えて定説なし

○倭訓栞に津嶋牛頭天王の社は嵯峨天皇の御宇

祠を建されど神名式には載せず神主の初は尹

良親王の二男良新王より起るといふ智證大師

の傳にも見えたれば由来久しとあるは浪合記

に依て書たる也尹良新王は尹良親王に作るべ

し智證大師の傳に見えたりといふは津嶋神の事にて神主を指せるにあらずさて津島牛頭天」二九才
皇の事三善清行朝臣の天台宗延曆寺座主円珍、
傳今昔物語十一の十一語元亨釋書三の卷の傳
などにはみえねど圓珍山王明神を祈りしを神社考に素戔鳴神のよしいへるに起れる説なるべし津島の名は名寄の長明か歌夫木の中務のみこのうた宗長手記名所方角抄などにみゆ南朝系図を作りて御覽入候

○南朝系図へ按「南朝之称始見_テ于太平記十九卷青原軍条_ニ焉」
(二行空白) 二九ウ

○後醍醐天皇

後宇多院第二皇子母、談天門院藤忠

子内大臣師經公、養女実、参議忠継卿、

女也正應元十一二降誕御諱尊治文保三二

廿七踐祚延元四八十六崩葬于吉野塔尾山

陵宝筭五十一本朝皇胤 紹運録増鏡皇年

代畧記太平記

尊良親王

母冷泉為世卿女贈三位為子慶長元誕

生一品中務卿延元三三六生_三害于越前

国金崎城「御年廿称」²²一宮「紹運録増鏡太

平記

守永親王

一品上野太子蓋称_三一品宮_一或称_三宇都峰宮及西應寺宮_一新葉集元弘日記

結城古文書

良玄大僧正

母蓋從一位右大臣公顯公女御匣殿二条関白良基公猶子入_三室一條_一三〇才

院二十四世門跡傳南朝紹運圖

母大納言典侍増鏡一本

女王

南朝紹運録圖_三為_二女王二人_一

世良親王

母参議實俊卿女遊戲門院_一一条上野太

守又太宰帥元徳二九十七薨称_三河端宮_一紹運録増鏡常樂記

女王

紹運録

護良親王

母民部卿三位大納言師親卿女_二品天

台座主兼_三梨本大塔兩門跡_一故称_三大塔宮_一

元弘元還俗同三征夷大將軍建武二七廿三

為「足利直義」被「害」於鎌倉「紹運錄太平記」

陸良親王

一本紹運錄圖作「常良」母北畠准后親房

卿妹征夷大將軍正平十五年謀反自害「三〇ウ

太平記寺院文書纂櫻雲記紹運圖南方

記傳按「石川忠総自記遊行十二代上人」大塔

宮御子云「甲府一蓮寺系圖遊行十二代尊

觀上人龜山院御子常盤井殿一品式部卿恒

明云「常盤井殿第四子遊行十二代上人尊

觀云「此与「石川記之說」相矛盾

女王

母「竹原八郎女

太平記

宗良親王

母「同「尊良」正和二誕生天台座主尊證延

元元還俗一品中務卿名「宗良」征東將軍

天授三落飾元中二十八薨「于遠江國井伊谷」

年七十三新葉集者称「信濃宮」或上野親王

新葉集太平記天台座主記信濃宮傳

興良親王

母「狩野介貞長女天授三九月薨「于京

都」新葉集李花集信濃宮傳「三一才

尹良親王

母「知久四郎左衛門敦貞女或云井伊

介道政女於「信濃國」生害浪合記

女王

一本南朝紹運圖大橋三河守定省室

良王

母^ハ世良田政義女住^ニ于尾張津嶋^一

大橋氏祖 浪合記

良新

母同^ニ良王^一

信重

母^ハ大橋貞元女

静尊法親王

母^ハ參議實俊卿女初^ハ諱惠尊又尊珍
嘉曆三正晦親王宣下聖護院御入

室

紹運錄釋家官班記「三一ウ

恒性法親王

大寛寺²³御入室元弘三十九於^ニ越中國^一
為^ニ北條^一被^レ害称^ニ越中宮^一 紹運錄門跡

傳太平記

滿良親王

母^ハ中納言宗親卿女親子元弘三誕生称^ニ

花園宮^一後落飾号^ニ無文選²⁴禪師^一渡元帰朝

之後歷中²⁵七閏三廿二於^ニ遠江国^一入寂年六十

凡無文元選禪師行狀元弘日記佐伯杏仙蔵

古文書

恒良親王

母新待賢門院正中元誕生建武元正廿三立坊延元十月北國下降同三七十

二為足利尊氏被鳩殺年十五 太平記紹運錄增鏡

成良親王

母同上正中二誕生建武元鎌倉下向号將軍亦上野宮同三七月為尊氏被鳩殺

年十四 太平記紹運錄

看良親王「三三才

尊親法親王

又名果尊母少納言内侍四条隆資卿女 紹運錄新葉集

法仁法親王

母從三位為道卿女正中二誕生初諱躬良又省良仁和寺御入室正平六二

廿二叙二品同七十廿五遷化年廿八 紹運錄仁和寺御傳

人皇九十六代

後村上院

諱義良母新待賢門院廉子嘉曆三九月

降誕元弘三親王宣下延元、御元服三

品陸奥太守同三十八七御即位正平廿三三

十一崩御年四十一 神皇正統記太平記元

弘日記鳩嶺雜事記花宮三代記

懷良親王

母從三位為道卿延元中九州下向居

于肥後国八代、元中中薨号、牧宮、或阿蘇

宮鎮西宮高田宮九州宮征西將軍宮 太平記

紹運錄後醍院系圖按明史名山藏等諱作

良懷、一二二ウ

良宗

母菊池武光妹正平十五誕生後号、後醍院

越後守、死、于九州、後醍院系圖

良忠

後醍院伊豆守其子孫仕、嶋津家、

後醍院系圖

聖助法親王

母、少納言内侍菅原在仲卿女

聖護院御入室 紹運錄

玄圓法親王

母、從二位守子後、山本左大臣女、一乘

院御入室 紹運錄諸門跡譜

皇子

母中納言典侍親子宗親卿女
紹運錄

皇子

母同「護良」紹運錄「三三才」

皇子

母同「法仁」阿蘇宮
紹運錄

皇子

母昭訓門院近衛
紹運錄

權子内親王

母後京極院為「伊勢齋宮」後光嚴院中
宮其後称「宣政門院」入「于保安寺」落飾
紹運錄增鏡女院小傳新葉集作者部類

准后

紹運錄

祥子内親王

母、新待賢門院元弘三為_二伊勢齋宮_一、称_二前齋宮_一、後入_二于保安寺_一、落飾号_二長慶門_一、
歷代皇記新葉集紹運錄作者部類南朝

院_一

紹運圖

妣子内親王

女同_二護良_一、今林尼衆
紹運錄_一 三三ウ

帷子内親王

一品異本紹運錄
作_二權子_一

欣子内親王

母新待賢門院今林尼衆号_二鷲尼_一、
紹運錄作者部類

皇女

母同_二世良_一、今林尼衆

皇女

母、遊義門院、左兵衛督、局為忠卿女
今林尼衆 紹運錄

皇女

母同_二尊良_一、
紹運錄

皇女

紹運錄

皇女	皇女	皇女	皇女	皇女	皇女	皇女
紹運錄	母大納言局 紹運錄	母一品實子山階左大臣女 紹運錄	母民部卿局関白基嗣公室 後離別 紹運錄	母基時女 紹運錄	母後宇多院權中納言女房 紹運錄	紹運錄「三四才」

皇女

母後室町院

紹運録「三四ウ

皇女

母同「法仁」²⁶

人皇九十七代
後龜山院

母嘉吉門院福恩寺関白女也諱熙成正

平廿三三月御即位元中元²⁷閏十月与^三北

朝「御和睦之後住^三于嵯峨大覺寺」應永元二廿

二²⁸太上天皇即日御落飾法諱覺理灌頂又金

剛心同卅一四十二崩宝筭末^レ詳 紹運録和

漢合運吉野拾遺椿葉記皇年代畧記

母同上諱寛成

長慶院

称^三玉川宮「花咲松

尊聖大僧正 日本史

惟成親王

母大藏卿局中努卿又式部卿又太宰帥

落飾之後号^三梅陰祐常^一 古今系圖新葉

集五百番歌合「三五才

秦成親王

母同^三後龜山院^一正平十五年誕^三生於住吉^一

太宰帥及式部卿後為_二後龜山院太子_二元
中_レ薨 新葉集南朝紹運圖

世恭親王
母從_二二位教子_一

說成親王
母新待賢門院冷泉上野太守号_二護性院
宮_一或五常院宮 南帝系圖諸門跡譜

圓悟大僧正
母楠正儀女住_二于圓滿院_一
諸門跡譜

帥成親王
兵部卿出家_{シテ}号_二惠梵_一
新葉集李花集奧書

良成王
鎮西宮 古系圖

憲子内親王
一品宮
新葉集「三五ウ

皇子

小倉宮
御母中宮信子土御門右大臣顯信卿女也
住_二于嵯峨_一 椿葉記

教尊大僧正
諱恭仁後勸修寺御入室大僧正兼_二安

詳寺々努^一 椿葉記諸門跡譜

尊義王

万壽寺宮空因還俗^{シテ} 称^レ尊義王^ニ 嘉吉三九廿

三乱^ニ 入于北朝内裏 纂^ニ神器^一 後敗死^ス

椿葉

記櫻雲記南方記傳

尊秀王

母色川左兵衛盛定女也 一宮又稱^ニ自天親

王^一 長祿元於^ニ吉野山^一 被^レ害 上月記南方記

傳後崇光院御記

忠義王

二宮或称^ニ河野宮長祿元於^ニ吉野山^一 被^レ害

上月記南方記傳^一 三六才

尊雅王

長祿二六月被^レ害

上月記

○系統未詳之分

最惠法親王

南朝紹運圖後西^ニ 皇子母^ハ山本左大

臣女新葉集異名見^ユ一説^一玄圓法

親王御周人云々

深勝法親王

龜山院御孫父、常盤井式部卿恒明親王、
為「後村上院御猶子」、後住「于相」

模藤沢山「遊行十二代上人稱「南門跡」」新葉

集紹運錄、南朝紹運圖、按「甲府一蓮寺遊行十

二代上人系圖、常盤井恒明御子弟一帥親王

全仁第二、西西寺座主二品親王深勝第三、西

西寺座主一品親王杲尊第四、遊行十二代上

人尊觀為「後村上天皇之太子」云々

仁譽法親王

深勝法親王御弟、東南院入室

新葉集紹運錄、南朝紹運圖「三六ウ

懷邦親王

一本南朝紹運圖、後二条院皇孫式部

卿邦世親王子、天野信景說、為「後西西、

皇子」

尊融禪師

南朝紹運錄、為「後西西皇子」

保安寺、宮春蘭和尚

石見宮

正平七五十一、於「八幡山」被「討

豫章記

植田宮

後愚昧紀「云天授三八十一、故宮僧正御

子植田宮於鎮西被討

高田宮

應永初起兵於東國、驍而自害

陸奥河沼郡牛澤組塔寺澤八幡宮長帳

右南朝系圖取捨、花咲松南山巡狩録殘櫻記等之
説而作之

第十三宰相大将「三七才」

○源氏物語葵の巻へ湖月抄本第一頁へにたゞ春宮をぞいと

恋しうおもひきこえ給御うしろみのなきをう

しろめたうおもひきこえて大将の君によりづ

きこえつけ給ふもかたはらいたきものからう

れしとおぼすまことやかかの六条の御息所の御

はらの前坊の姫宮菊宮にゐたまひにしかば大

将の御心ばへもいとたのもしげなきを云々

○河海抄へ葵の条へに源氏参議、大将、事天平神護元年改

授刀衛為近衛府平城天皇大同二年四月廿二日

改近衛大将藤原朝臣内麻呂へ大納言真楯男へ為左三七ウ

近衛大将改中衛大将坂上田村麻呂へ従三位葛田

丸男へ為右近衛大将

参議兼大将例

へ右大臣不比等男へ藤原房前へ中衛大将へ

〈左大臣武智丸男〉同 豐成〈中衛大将〉

〈右衛士、府生國勝男〉吉備真吉備〈中衛大将〉

〈参議乙丸男〉藤原是公〈同上〉

〈右大臣清丸男〉大中臣諸魚〈近衛大将〉

〈右大臣是公男〉藤原雄友〈中衛大将〉

〈大納言真楯漢〉同 内麿〈近衛大将〉「三八才

〈正四位下大原男〉文屋綿麿〈左近衛大将〉

〈右大臣内丸男〉藤原冬嗣〈左近衛大将〉

〈右大臣繼繩男〉男 乙叡^{タクトシ}〈中衛大将〉

〈兵部卿綱繼男〉藤原吉野〈左近衛大将〉

〈贈太政大臣清友男〉橘氏公〈右近衛大将〉

〈右大臣良相男〉藤原常行〈右近衛大将〉

〈右大臣師輔男〉同 伊尹〈左近衛大将〉

○花鳥餘情〈葵の条〉に源氏の君を大将といふこと此卷

よりはじまる也大将は参議より丞相までも兼

帶する職也源氏は此時参議大将なり云々」三八ウ

○源氏物語、若菜の上卷〈湖月抄本第九頁〉に廿がうちには

納言にもならずなりにきかしひとつあまりて

や宰相にて大将かけ給へりけん云々

○栄花物語、布引瀧の卷〈印本十九の卷廿一頁〉に大将にはと

のゝ三位中将宰相にならせ給て大将かけさせ

給ひつ云々へ按承保四年四月九日藤師通参木大将になられしことなり

○公卿補任、白河院承保四年へ十一月十七日改元承暦の条に参

議正三位藤師通三月廿七日任、正中将、四月九日

兼左近衛大将、十二月十三日任、權中納言、十六云

々へ按に補任中、此外参木大将の所見あり、三九才

○官職秘抄へ上卷参議の条に兼、大将、例氏公常行二條

關白内大臣云々へ按に氏公は右大臣橘氏公也常行は藤冬嗣公孫良相公男なり

関白内大臣は後二條関白師通公也承暦元三廿七任、参議、同四月九兼、左大将、

與清按に宰相大将とも参議大将とも通はし書

るは宰相は参議の別名なれば也寛正本、職原抄、

首書へ奥書に寛正五年甲申五月上旬之條以、權大外記隼人正家、本、書寫讀合了とあり余が許

に物学せらるゝ渡邊轉ぬしの家に祕傳せられたり、に書、此官、則参議書之

呼、其人、則曰、宰相殿、也有、八人、而紛、則加、氏、呼、宰

相藤、宰相、也云々、首書印本に書、位署、時、参議、也呼、

名、時、宰相也、書、時、或、源、参議、菅、参議、呼、名、之時、藤、宰、三九ウ

相平、宰、相、也、人多、故、以、氏、別、云々、と見ゆ、漢土の宰

相は上相の事にて其義は高承が事物紀原へ四の卷

にくはし本朝宰相の名始て續日本紀へ十の卷神龜五年三

月丁未の段へに出たれど公卿にわたれる称にて参議

にかぎらねは参議の別名に定めいへるはそれ

より後なるべし参議は職員令に大納言四人掌

参議スルコトヲ 庶事シヤ 義解に謂與、右大臣以上、共参議スル也 天下之

庶事云々續日本紀へ二の卷大宝二年五月丁亥の条に勅シテ從三位

大伴宿祢安麻呂正四位下粟田朝臣眞人從四位

上高向朝臣麻呂從四位下下毛朝臣古麻呂小野一四〇オ

朝臣毛人令参議朝政云々などあるは定れる官

名とも聞えず公卿補任に大寶二年以後代々参

議の官ありしゆえに記されたれどこは後の書カキ

續の条なれば信かたし補任へ靈龜三年十一月十七日改テ為養老元年

に靈龜三年十月廿日從四位下藤朝臣房前任参

議云々續紀へ十一の卷天平三年八月丁亥の条に依テ諸司擢ニ式部

卿縣守兵部卿從三位藤原朝臣麻呂大藏卿正四

位上鈴鹿王左大辨正四位下葛城王右大辨正四

位下大伴宿祢道足六人並為参議云々などある一四〇ウ

を実任の始とやすべきまた権参議准参議非参

議あり権参議は續紀へ十の卷天平元年二月壬申の条に以テ太宰

大貳正四位上多治比真人縣守左大辨正四位上

石川朝臣石足禪正尹從四位下大伴宿祢道足權

為参議云々補任へ神龜六年八月五日改テ為天平聖曆元年に神龜六年

二月日多治比真人縣守任權三木三月二日叙從

三位兼太宰大貳云々また天平三年八月日從三

位藤原朝臣麻呂任權参議云々官職秘抄へ上卷参議

の条に権参議、例天平元年云々（按に元年は三年の誤也）など
見ゆ准参議は補任（平城天皇の条）大同元年閏六月三十一才
日從四位吉備朝臣和泉任准参議云々官職秘抄（上卷）

参議の条に准参議、例大同元年云々とあり非参

議は一概にいひがたしそは位に就て云々と官に
就ていふとの二種あり三位以上の人の官なく

て位ばかりなるをいふ一なり最初より官に任
ぜず位ばかり進たる亡三位以上と官をば辞し

て位ばかりになりたる散三位以上とを共に非

参木と称す又参木の官に任じたる人の致仕し³²

して前官にてあるは四位にても非参議の例也

これらは位に就ていふ非三木にて職原抄近衛「四一ウ

大將篇の首書に二三位以上之人無官職者都曰

非参議、但前宰相雖四位、又是非参議之列也

太宰大貳の篇に所謂非参議四位是也といひた

るにて明也又位は四位にても参木に任ずべき

人のいまだ参木に任ぜずしてあるほどをいふ

二なり源氏物語帚木の卷になまゝのかんだち

めよりも非三木の三四位どもの世のおほえく

ちをしからずもとのねざしいやしからぬか云

云これは三木已上を公卿としてそれに對て三木

ならぬ家族イノガタのものを非三木の三四位といへる」四二才

也へ若菜の上巻にも非参木の四位とあり同書竹川の巻に右兵衛督

右大弁にてみな非参木なるを云々是は三木に
任ずべき人のいまだ任ぜざるほどをいへる也

へ藤の³³裏葉の巻にも非参木のほどなにとなきわか人こそふたあゐはよけれど有職

原抄蔵人所の篇に非参木大弁とあるも同義也
試にいはゞ左右大弁左右中将左右衛門督左右

兵衛督蔵人頭年勞ある左中弁式部大輔の御侍

讀たる人へ本朝文粹六の卷正四位下式部大輔菅原文時の請狀に非参議之四位中文時

已為^ニ第一也ともみえたりなどみな非参木の四位也これら

は官に就ていふ非三木也参議はもと朝政に参^{マシハリ}「四二ウ
議よしの称にてその朝政に與^{アツカ}らぬは非参議也

また参議の官に任ずべき人のいまだ任ぜざる

ほど或は位階のみ進^{スベキ}たるなども非参議³⁴にて公

卿補任に従三位長屋王和銅二年十一月一日非

参議云々従三位藤原朝臣武知麻呂養老二年非

参議云々従三位藤原朝臣宇合神龜三年正月七

日非参議云々従三位藤原朝臣弟真天平四年正

月非参議云々などおほかり参議権参議非参議

を並置^{ナラベオカ}れし事も見ゆ寶積類書へ十二の卷官職部へに圓城

寺殿類聚抄非参議弄花^{ニグル}云不^レ任^セ参議「二三位之人」四三才

又公卿前官共称^ニ非参議^ト畢竟不^レ預^ニ大政官之政務^ニ人之事也。花鳥餘情云不^レ任^ニ参議^ニ三位四位称^ス非参議^トともありかく官位に就て非三木の称あるを分別すべし。参議の字面漢書公孫弘傳に與^リ参謀^ニ議^ニ云々母將降傳に與^リ参謀^ニ議^ニ云々匡衡傳に與^リ参謀^ニ議^ニ云々などみえたれど直にいへるは後漢書賈復傳に與^ニ公卿^ニ参^ニ議^ス國家大事^ニ云々班固傳下に爲^{シテ}中護軍與^ニ参議^ス云々董均傳に輒令^ニ釣³⁵参議^ニ云々晋書孝武定王皇后傳に臣等参議云々周書竇熾傳に常與^ニ参議^ス云々などあるを出処とす又参議「四三ウを八座といへるも別名也職原抄へ上卷」参議の条に八座者異朝八座其職各別也本朝聖武天皇天平三年置^ニ参議^ニ大同御宇罷^テ参議置^ニ五畿七道觀察使^ニ合八人弘仁御宇罷^テ觀察使皆爲^ニ参議^ニ云々八人自此而始依^レ之有^ニ八座之號^ニ云々百寮訓要抄に参議云云是はむかしより八人當時も子細なし八座と申也云々故實拾要へ十二の卷参議の条に當官を八座ノ臣ト云是非唐名八人八疊二列座ス故二八座ノ臣ト称ス云々文德實録八の卷へ齋衡三年四月庚寅の条に恨^レ不^レ登³八座云々本朝文粹六の卷へ菅三品請^ニ從三位^ニ狀^ニに伏^ニ四四才檢故實儒者之式部大輔以十年已下勞必拜八座

之例云々など見ゆ漢土の八座は晋書職官志に後漢光武以三公曹主歲盡考課諸州郡事改常侍曹為吏部曹主選舉祠祀事民曹主繕脩功作鹽池園苑事客曹主護駕羌胡朝賀事二千石曹主辭訟事中都官曹主水火盜賊事合為六曹拜令僕二人謂之八座尚書雖有曹名不以為號靈帝以侍中梁鵠為選部尚書於此始見曹名及魏改選部為吏部主選部事又有左民客曹五兵度支凡五曹尚書二僕射一令為八座云々唐六典へ一の卷尚書令の条に後漢以三 四四ウ尚書令僕射及六曹尚書為八座云々今則以三二丞相六尚書為八座云々杜氏通典へ廿二の卷歷代尚書八座附の条に八座後漢以三六曹尚書拜令僕二人謂之八座魏以三五曹尚書二僕射一令為八座宗齋八座與魏同へ晋梁陳不言八座之数隋以三六尚書左右僕射及令為八座大唐與隋同云々へ文献通考五十二の卷職官考說亦同へ此外所見おほかれど本朝の八座と異也又相公といふも参議の異名也いにしへ善相公藤相公澄相公菅相公野相公江相公へ已上本朝文粹所見などきこえ故實拾要へ十二の卷参議の条に相公ト云モ参議ノ非唐名といへりこ 四五才れも漢土にては丞相を尊称せる也文選へ廿七の卷行旅下王仲宣か従軍詩に相公征関右注に善曰曹操

為^ル丞相^ニ故^ニ曰^ク「丞相公^ト」也とあるにて知べしさて参議

の和名は和名抄へ五の卷職官部へに本朝式員令^ニ云^フ参議^ヲ於

保^ホ万^{マン}豆^ツ利^リ古^コ止^ト比^ヒ止^トとみえたるを北山抄袋草紙

職原抄聞書寶石類書などやうの書にマツリゴ

トマウチギミ或はマジハリハカルなどよめる

は誤也高大夫實無が百寮倭歌に参議をよみ

かける道に賢き名を得つゝものしり人や今ぞ

みしらんとよめり³⁶後拾遺集序にやくものつか」四五ウ

さにそなはりて云々藻塩草へ十五の卷人倫異名部へに宰相

やくものつかさ云々異名分類へ二の卷人倫部へに八座^{ヤシラノツカサ}職

欵云々綺語抄へ中卷官位部へにもろゆき宰相をいふ云々

第十四いわちどおりいわさいわけなきすゞ

は小きをいふ長洲の濱名草の濱千鳥

○兼輔卿集に女のうらみてなきけるに「いわ千

鳥あやなかるねはたれゆゑにながすの濱のな

かずもあらなん女かへしゝ物思ふなぐさの

濱のいわ千鳥なくさむ間にぞなきまさりける

松永氏へ貞徳へ云へ歌林樸樸一の巻へ岩千鳥ハチトリノ名也云」四六才

云與清曰此説ひがこと也貫之朝臣自筆の本へ堤中納言

集へにもいわちどりと書れて岩^{イハ}とは假名だがへ

り濱千鳥浦千鳥河千鳥などはその住所^{スミドロ}により

ておほせし名なれど岩千鳥といひてはことわり

きこえず今按にいわ千鳥は驚オドロきさわぐよりい

へる名なるべし日本紀雄略紀〈前紀〉に駭惋イワケ

アワテ、云々安閑紀〈元年〉に驚駭イワケテ云々皇

極紀〈二年〉に喘息イワケテ云々なとみな驚きさわ

ぐ³⁷意の字をいわけと訓ヨミたり〈釈日本紀秘訓同〉さて轉ウツ

りては物語書に幼稚をいわけなきといへるも」四六ウ

物におとろきやすきよしの名也源氏物語紅葉

賀に心なげにいわけてきこゆるはなどさぶら

ふ人にもきこえあへり云々夕霧になほいとい

わけてつよき御心おきてのなかりける云々繪

合にゆめにもいわけたる御ふるまひあらばこ

そ云々螢にいわけたるひ々なあそびなどのけ

はひの見ゆれば云々栄花物語かゞやく藤壺に

いわけたることなく云々などあるも幼くこめき

たるさまをいへり契沖阿闍梨〈源注拾遺二〉いわけ

といへるはいわけなきなればいわけなきもな」四七オ

きは付たる字にておほけなきの類也無ナシの字の

心にはあらぬなるへし云々谷川氏〈士清〉云〈倭訓栞三〉い

わけなき幼稚を物にかくいへりいとけなしと

おなじ物におどろきやすき時なれば驚駭をい

わけといふ義に通へりいわけてとも侍れば是

もなきは助の詞なるべし云々師説〈春海翁〉云〈假字拾要〉

伊は宇比ウヒの約にて稚ワケの義和氣ワケは若ワカの義にてう

ひわかきといふ詞ならん坎駭カンガイの字をいわけて

と讀るもをさなき人は物におどろきやすきも

のなれはおどろくことをいわけといふにやとも」四七ウ

おもはるされと此詞さだかにはいひがたし猶

正しき證を得るをまつべしまた紀に喘息の字

をイワケと訓るはおどろくをイワケといふよ

り轉テじたる訓と見ゆイワケハ息涌イキワクの義坎イキ

をイとのみいへることもワクをワケとかよはし

いへることも古語おほし喘息の字をよめるが此

語の本義なるべしさて物におどろく時はいき

づかひなともあらげになるものゆる驚オドロくことに

もいひ又をさなき人は心しづまらでいきづか

ひなどしづかならねばをさなき事をもしかい」四八オ

へる也云々與清曰いわけなきといふ詞三代實

録の宣命に幼少へ八の卷卅六の卷幼穉へ廿九の卷也」などの字を

訓ヨミたりされどこれはイトケナキとも訓ヨミつべし

古今六帖〈三の卷〉に「あふことのかたよせにするあ

みの目にいわけなきまで恋かゝりぬる夫木抄

〈雑十六〉に知家へ世の中はいわけなき子のおもぎ

らひ見しがなきにはねこそおかるれ³⁸などよめ

り物語の詞に見えたるは舉^{アゲ}つくすへからず是^{コレ}
等を思ひわたしていわ千鳥は駭^{イワ}千鳥の義なる

ことしるべしいわはよわと通ひて心よわく驚き」四八ウ

さわぐよしの詞ときこゆ萬葉集へ七の巻〉に「佐保^{サホ}

河爾小駭^{カハニアツ}千鳥夜三更而爾音聞者宿不離爾とあ

る小駭千鳥をアソブチドリノと訓る古訓うけ

がたし駭は説文に馬疾歩^也也玉篇に奔^也也詩小雅

注に小疾^{グキヤフ}曰^レ駭^トまた凡^ソ疾速^也曰^レ駭^トなと見え雄略紀

〈前紀〉に駭ハシリテとも訓たれは雉のさをども鮎^{アユ}

のさばしるなとにむかへてサバシルチドリと

も訓^{ヨム}べく又イワケチドリとよまんもしかるべ

し駭^{オドロキ}てさばしりさわく義なれば也壬生忠岑の

〈夫木抄夏二〉へ夏川のいはねをわくるいわ千鳥つひ」四九才

にさてやは世をば過さんとよめる歌によりて

岩根をわくる物なれば岩千鳥といふと思ふへ

からすわとは³⁹通音なればかくいひ重^{カサネ}ねたるの

みにて古歌に例おほし此歌の意は岩根のかた

きをわくるいわ千鳥のごとく思ふを通らでや通

すらんとよめりいわ千鳥によわといふ詞をよ

せて女の心づよきに己が心よわきよしをそへ
たる也又清輔朝臣〈家集〉の水草隠^ス橋といへる題に
てまこも草たづきもしらず成にけりいわけ
のすゞや沼のまろ橋といふ歌ありいわけのす」四九ウ
ずは弱^{ヨワ}氣のすゞにてまこも草の力^{チカラ}なきさまな
るをいふ歎すゞとは草木のしげりたるをいふ
詞にてすゞめがくれ〈曾丹集〉すゞめとなれるかげ
へ山家集夫木抄夏二〉などよめりそはしゞの通音にてしげ
みの事をいふしゞとは繁^{シゲ}きをいへるにてしゞ
ね〈散木集〉などもおなじ此しゞねすゞめのゆゑよ
しは末にいふべし此歌の意はまこも草の便^{オビ}もし
らぬばかり生^{オヒ}しげりたればそのよわけなるす
ずのしげみの上をや橋にはかへて渡るべきさ
れどたふれまろひぬべく思ふよしをよせてま」五〇オ
ろばしとはよまれしなるべしそれに篠^{シノ}をもす
ずといへはやがて篠^{シノ}にとりなして射^{イワケ}分の篠^{スバ}矢
とよせられたりとも聞ゆさてはしめの兼輔朝
臣の歌の意は女をいわ千鳥にたとへていわ千
鳥よしる⁴⁰あやなく無益に泣音たつるは何ゆゑ
ぞなかすの濱といふもあるに濱は千鳥の栖^{スミカ}處
なればその名を思ひて泣^{ナカ}ずあれかしとよみ

かけられたる也女のかへしの意は名字の濱と

いふ名によりて物おもひもなぐさむやおも

ふに中／＼なげかれていよ／＼泣^{ナキ}まさると也^ナな⁴¹か^カ」五〇オ

すの濱は日本紀〈履中紀五年〉に出^デ於^{スノ}是^{サキニ}渚^ム崎^ム一令^{ハシヒセ}祓^{ハシヒセ}除^{ハシヒセ}」云

云谷川氏〈士清〉云〈通紀十七の卷〉撰津國河邊郡長洲村云々

拾遺集〈恋一〉よみ人しらず人しれずおつる泪は

つのくにのながすと見えて袖そくちぬるまた

〈恋五〉よみ人しらずこひわびぬかなしきこともな

くさまんいづれながすの濱べなるらん空穂嵯

峨院にゝしほたるゝことこそまれ世の中を思

ひなかすのはまかひなくて相模家集にゝいの

ちだにながすにあらはつのくにのなにはのこと

そうれしかるべき又ゝつのくにのなにはの事」五一オ

もおもはずて長洲にあそふたづのよをしれ為

家集〈新撰六帖〉ゝわが袖の海となる尾は津のくにの

ながす泪のつもり也けり勅撰名所和歌抄出〈濱部〉

に長洲濱撰津河辺郡云々十四代集名寄〈濱部〉にナ

カスノ濱撰云々歌枕名寄〈十六の卷〉に撰津國長洲濱

云々類字名所和歌集〈三の卷〉に長洲濱撰津河辺郡

濱河尾云々陸西遊行囊抄〈三の卷〉に長洲は神崎川

ノ西邊神崎ノ駅ノ南ヲイフ云々撰津志〈八の卷〉河

邊郡、村里部に東長洲中長洲西長洲属^ス一邑^ニ云々

撰陽群談へ五の巻に長州濱川邊郡長河村⁴²ニ属ス云「五一ウ云此外古歌も古書の所見もあまたあれどふよ

うなれば引出ず名草の濱は和名抄へ五の巻の紀伊國郡名に名草奈久佐国府云々日本紀へ神武紀に六月

軍至^テ名草邑^ニ則誅^ニ名草戸畔者^ヲ云々へ旧事紀同へ舊事紀へ四の巻に紀伊名草姫^ヲ為^レ妻云々またへ五の巻に紀伊國造智

名曾妹名草姫^ガ為^レ妻云々續日本紀へ三の巻四の巻九の巻廿六の卷卅の卷卅四の卷卅五の巻より後の史に名草郡おほく見ゆ

日本後紀へ廿一の巻に弘仁二年八月丁丑^ス廢^ス紀伊國菰原名草賀太三驛^ニ以^レ不^レ要^{ナラ}也云々またへ廿二の巻に弘仁三

年四月丁未廢^ニ紀伊國名草驛^ニ更置^ニ萩原驛^ニ云々延「五二才喜式へ式部式に名草郡^ニ為^ニ神郡^ニ云々萬葉集へ七の巻に^ナ名

草山事^{クサヤマコト}西在^{アリ}来^{クワ}吾^ワ恋^{コイ}千重^{チヒト}一重^{ヒト}名草^{ナカサメ}目名國^{メナクニ}後撰集へ恋三よみ人しらず^キのくにの名草の濱は君なれ

やものいふかひありときつる夫木抄よみ人しらず^キのくにのなぐさの濱に貝ひろふあま

のめざしのおとくなりせば新撰哥枕へ八の巻有家へ思ふことしばしなくさの濱千鳥あそこそかよへ

和歌の浦浪此外古歌おほかれと證にすべからぬをば引出ず紀路歌枕抄に名草浦山名草郡紀

三井寺村の山をいふ浦山共に此所也云々玉勝」五二ウ

間へ九の巻」に名草山は紀三井寺也云々紀伊名所圖會へ五の巻」海士郡部に名草山三井山の惣名也名ぐ

さの濱は名草山の西のふもとに有云々與清曰

千鳥は百鳥五百津鳥百千鳥に對へて多の鳥を

させる名なれど萬葉集に河千鳥夕波千鳥など

よめるは一種の物ときこゆ和泉式部家集へ四の巻」

詞書にはちどりのこゝ⁴³ひとつたてる源平盛衰

記へ卅一の巻」青山琵琶の条には二羽の千鳥飛出テな

ともありこは貝原氏へ篤信」が千ドリ河海ノ水邊ニ

アリ類種⁴⁴アリ其形鵲鴝又鳴ニ似タリへ大倭本草十五」と五三オ

いへる物なるべしそは百千鳥もあまたの鳥を

原本不明いふカ

□⁴⁵なるに又鶯のことくしてよめる歌おほかるが

ことし千鳥の歌は瓊々許根尊の濱津千鳥とよま

せたまへるをはじめとすへ神代紀下」千鳥百千鳥のこと

は末にいふべし

第十五多嶮摩知余の心の乎与の心の乎大坂

山口がてんかも當麻

○日本紀へ十二の巻」履中紀天皇御歌にへ於明佐箇珥阿

布夜烏等謎鳥游知度沛麼哆駄珥破能邏孺多嶮

摩知鳥能流紀文に爰仲皇子畏有^ニ事將^ニ殺^ニ太子密」五三ウ

與^ニ兵圍^ニ太子宮^一時^ニ平群^{ツクノ}木菟宿称物部^ノ大前宿称漢^ヲ
 直祖阿知使主三人啓^ス於太子^ニ云^ハ不^レ信^{ウケ}へ一云太子醉以不^レ起^テ
 故三人扶^ケ太子不^レ在^サ令^レ乘^セ馬而逃之^ニへ一云大前宿称抱^ニ太子^一而乘^レ馬^ツ仲皇^ツ
 子不^レ知^ニ太子不^レ在^ニ而焚^グ太子宮^一通夜火不^レ滅太子到^ニ
 河内國^{ハニフ}埴生坂^ニ而醒^{サメ}之^{カヘリミ玉ヒ}顧^ニ望難波^一見^ユ火光^一而大驚急^ニ
 馳^テ之自^ニ大坂^一向^ヒ倭^ニ至^ニ于飛鳥山^一遇^ニ少女於山口^一問^ヲ之^ニ
 曰^ク此山有^レ人乎對曰執^レ兵者多滿^ニ山中^一宣^ニ廻自^一當摩^マ
 經^一踰^ニ之太子於^レ是以^{オモホサク}為聽^テ少女言^一而得^レ免^ニ難則歌^テ之^{ハヒラ}
 曰云々古事記^{ヘ中卷}履^ニ中記^一に伊邪本和氣命云^ニ到^ニ于
 多遲比野^一而寤^ニ云^ハ到^ニ於波迹賦坂^一望^ニ見難波宮^一其^一五四才
 火猶炳^{ナホアカシ}烟^ニ到^ニ幸大坂山口^一之時遇^ニ一女人^一其女人
 白^ク之持^レ兵人等多塞^ニ茲山^一自^ニ當岐麻道^一廻應越幸爾^{マケリケマスベシトカレ}
 天皇歌^ニ曰云々與清日^{クタギマチ}哆嵯麻知^{マカレルミチ}は曲道^{マカレルミチ}をいふ紀^{マカレルミチ}
 文に當摩經と書れしも直路ならぬよし也さい
 ふよしは常陸風土記に行方郡當麻郷古老曰^{クヤマト}倭^{ヤマト}
 武天皇巡行過^{スギユフニ}于此郷^ヲ有^ニ佐伯一名曰^{フトリヒコト}鳥日子^一縁^ニ其逆^一
 命^{ミコト}隨^{ミタコリニ}便^ニ路^一煞^{チス}即幸^ニ屋形野之頓宮^一車駕所^ニ經^ル之道狹^{ミチセバク}
 地深淺惡路^{トコロフクアサンニ}之義謂^ニ之當麻^一俗云多^ニ支^一斯^一と見え古事
 記^{ヘ中卷}景行記に倭建命云^ニ到^ニ當藝野^一上^ニ之時詔^ル者^ハ
 吾心恒^{ツネ}念^ニ自^一虛翔^{ソラユカント}行^ル然^{ルニ}今吾足不^レ得^レ步^一成^ニ當藝斯形^一
 故^{ナゾ}號^ニ其地^一謂^ニ當藝^一也^ハ美濃國多藝郡^ニとあるも御足の曲り

て舟の舳^{ウシ}の如^{ナニ}なれる也^ナへ舳^{ウシ}はか今の梶^カ也委^カクかぢ緒^ヲの条^ヲにいへり

出雲國の多藝志^{タギシ}之小濱^{コハマ}もへ古事記上卷^{コトヰノミヤノウラタ}濱辺^{ハマノヘ}の曲^{マカ}れる

よしの名なるべし當麻^{タマ}てふ地名^ナも出来^イし也^ナま

た多伎^{タギ}てふ地名^ナ神社^{シノヤ}の名^ナなど諸國^{シヨクニ}におほかる

は曲道^{マカミチ}によれるも瀑布^{タタキ}によれるもあるへけれ

ば其地^{キチ}を極^{キハ}めずては鮮^{イハ}がたし多岐麻^{タギマ}の麻^マは稲^{イナ}

日都麻佐^{ヒツマサ}と木津麻浦^{キヅマウラ}末^{マタ}などの麻^マにて地の廻^{マハリ}た

るさまを云詞^{クワジ}也浦箕^{ウラヒ}浦廻^{ウラマヘ}などもおなじ御歌^{ミカ}の

意^イは大坂^{オホサカ}に遇^アる少女^{シヨウメ}に道^{ミチ}とへば直路^{タヂミチ}をば告^{タノ}ず」五五才

して曲道^{マカミチ}を告^{タノ}たるよし也阿布夜^{アフヤ}の夜^ヤは助辞^{マカレミチ}鳥^{トリ}

等謎^ト鳥^{トリ}の鳥^{トリ}は爾^ニの心^{ココロ}の鳥^{トリ}也また余^ヨの心^{ココロ}の鳥^{トリ}と

してもきこゆ仁徳記^{ニトクキ}へ五十年^{ゴジュウネン}歌^カに和例^{ワレ}鳥斗^{トリト}波輪^{ハス}儼^ナ

云^{クニ}と允恭記^{インキョウキ}へ十一年^{ジュウイチネン}歌^カに余留^{ヨルト}等^ト枳^キと弘^{ヒロ}云^{クニ}と萬葉

集三^{ミツ}の卷^{マキ}赤人^{アカヒト}宿祢歌^{シュクネカ}に衣借^{キヌカサマシ}益^{マシ}云^{クニ}と六^ムの卷^{マキ}に

不^{オホ}所^ホ念^{ネン}来座^{キマセ}君^{キミ}乎^{ナニ}佐保^{サホ}川^{カハ}乃^{ナニ}河蝦^{カハシ}不^{キカセズ}令^シ聞^{キコフ}還^{マシ}都流^{ツル}香^カ

聞^{キコフ}十五^{ジュウゴ}の卷^{マキ}に伊敝^{イヘ}妣^ヒ等^ト乃^{ナニ}伊豆^{イズ}良^ラ等^ト和禮^{ワレ}乎^{ナニ}等婆^{トハ}

波^ハ云^{クニ}とこれら^{コノラ}の鳥^{トリ}は余^ヨの心^{ココロ}也また古事記^{コトヰノミヤノウラタ}へ上卷^{ウラタ}に

伊邪^{イサ}那^ナ美^ミ命^{ミコト}先^{サキ}言^{コト}ニ阿那^{アナ}迹^ヰ夜^ヤ志^シ愛^エ哀^{アハ}登^ト古^コ衰^シ後^{ノチ}伊邪^{イサ}

那岐^{ナギ}命^{ミコト}言^{コト}ニ阿那^{アナ}迹^ヰ夜^ヤ志^シ愛^エ那^ナ衰^シ登^ト賣^メ哀^{アハ}云^{クニ}と素戔^{スサ}鳴^ネ尊^{ノミ}」五五ウ

御歌^{ミカ}へ古事記^{コトヰノミヤノウラタ}上神代記^{カミヨロヰノミヤノウラタ}に曾^{ソノ}能^ノ夜^ヤ幣^ヘ賀^ガ岐^キ哀^{アハ}云^{クニ}と日本武尊^{ヤマトタケノ}

の御火^{ミヒ}焼^{ヤキ}之^ノ老人^{ロウジン}歌^カへ古事記^{コトヰノミヤノウラタ}景行記^{ケイコウキ}日本紀^{ニッポンキ}景行記^{ケイコウキ}熱田^{ネッテン}大神^{オホカミ}縁起^{エンギ}に比迹^{ヒコト}

波登^{ハト}袁加^{ヱンカ}袁云^{ヱン}云々とは余^ヨにかよへる袁^{ヱン}なり於^オ
明佐^ホ箇^サは坂^{サカ}の大^{オホキ}なるによれる名にて諸^{クニ}国^{クニ}にお
ほし於^オ佐^サ加^カといふも朋^ホを省^ヘていへるのみそは
小坂^{コサカ}長坂^{ナガサカ}などいふ地名に對^カへおもふべしこの
御歌^{ミカ}のは大和河内^{ヤマトカハチ}の堺^{サカイ}にて二上山^{ニシヤウ}の北^{キタ}を越^{コユ}る
道也本居氏^{ミナモトノウジ}〈宣長〉曰^{イハレ}〈古事記傳廿五の卷〉若櫻宮の段〈古事記履中記〉に
大坂山口とあるは河内^{カハチ}の方より上^{ノボ}る口なり又
孝德天皇の大坂^{オホサカ}磯長^{イソナガ}陵も河内^{カハチ}石川^{イシカワ}郡にて此山^{コノヤマ} 五六才
〈二上山也〉の西面也さて此道はいにしへはむねと往^カ
来^{ヨヒ}し大道なりしを今はさはかりの大道にはあ
らず穴蒸^{アナムシ}越^ゴといひて葛下郡穴蒸^{アナムシムラ}村と云より河
内国古市郡飛鳥村に到り古市などを経て難波^{ナニハ}
の方にかよふ道也さて穴蒸^{アナムシムラ}村に並ひて逢坂^{アフサカ}
村と云あるは大坂なるべきを後世にはおほと
あふと一ツに唱^{ナゲ}るから誤りて逢^{アフ}の字を書なるべ
し云々さて此地の古書に見えたるは和名抄^{ワナナシロ} 六の
卷^{マキ} 大和国葛上郡郷名に大坂云々 印本に太坂⁴⁷と書るは誤なり
神名式^{カミナナシ} 上卷^{ウヘマキ} 大和国葛上郡大坂山口神社云々 〈こは大和〉 五六ウ
の方より上る山口にて此御哥よませ玉へるは河内より上る山口なれば東西の別ありさて和
名抄には葛上郡と見えたるに神名帳に葛上郡と有は堺近きゆゑ此方彼方に隸たることありし
にて別処にはあらず 崇神記^{タカミヤノミコトノミカ} 古事記中^{コトニハシノミカ} に大坂神云々 應神記^{オウミヤノミコトノミカ} 古事

記〕に大坂道中云々履中記へ古事記下〕に到大坂山口云云
云崇神記へ日本紀五〕に武埴安彦與二妻吾田媛謀反逆與
師忽至各々分道而夫從二山城婦從二大坂共入欲襲二帝
京云々また倭迹々姫命云々箸撞陰而薨乃葬於
大市一故時人号二其墓一謂箸墓一也是墓者日也人作夜
也神作故運二大坂山石一而造⁴自⁴山至于墓二人民相踵
以手通傳而運焉時人歌曰⁴飲明佐介珥菟藝二五七オ
廻煩倒屢伊辞務邏場多誤辞珥固佐麼固辞介氏
務介茂此歌の意は大坂に継登りて重立る磐石
群なれどかくおほくの人の手越にして箸墓ま
て取傳へんには遂に越得んかと也介氏務は得
ん也万葉に不勝不得などの字をかてなくとよ
みて介氏は將勝將得なといふにおなじ箸墓は
大和城上郡箸中村にありて其間近からす天武
紀上へ日本紀廿八〕に初將軍吹負云々遣二佐味君少麻呂一
率二數百人一屯二大坂云々また間⁴近江軍至⁴自二大坂道一
而將軍引⁴軍如⁴西⁴當麻衢云々また將軍吹負既⁴五七ウ
定⁴倭地⁴便越⁴大坂⁴往⁴難波云々同紀下へ日本紀廿九〕に八
年十一月云々初置⁴關⁴於⁴竜田山大坂へ印本誤て大江と書たり
山⁴仍難波築⁴羅城云々續日本紀へ十五の卷〕に斐太始以⁴
大坂山沙⁴治⁴玉石⁴之人也云々三代實錄へ二の卷〕に授⁴

大和國從五位下大坂山口神正五位下云々また

〈三の卷〉大和國大坂山口神遣使奉幣為風雨祈焉云

云諸陵式〈延喜式廿一〉に大坂磯長陵云々新撰姓氏錄

〈十七の卷〉に大坂直云々孝德帝在河内國石川郡云々

萬葉集〈十の卷〉歌に大坂乎吾越來者二上余黃葉流

志具禮零乍この二上は神名式〈上卷〉に葛下郡葛木五八オ

二上神社と見え萬葉集〈二の卷七の卷十一の卷〉にもよめる

歌おほし葛城山のことも也後には音にニシヤウの

峰とよぶ源平盛衰記〈廿八の卷〉役行者事の条に二上

ノ嶽と書てニジヤウノタケとよみその外もの

にこれかれ見ゆ黃葉流は紅葉の散をいふ哆嶮

摩は和名抄〈六の卷〉大和國葛下郡の郷名に當麻〈多以來〉

云々用明記〈古事記下〉に天皇娶當麻之倉首比呂之女

飯女之子一生御子當麻王云々用明記〈日本紀廿一〉に元

年云々葛城直磐村女廣子生一男一女⁴⁹日麻呂子

皇子此當麻公之先也云々天武紀下〈日本紀廿九〉に十一五八ウ

三年云々當麻公賜姓真人云々新撰姓氏錄〈二の卷〉

に當麻真人云々垂仁紀〈日本紀六〉に七年云々當麻邑

有勇悍士^{イサミコハキヒト}日當麻蹶速云々天武紀〈日本紀廿八〉に到^ヲ當^{タキ}

麻衢云々神名式上〈延喜式九〉に大和國葛下郡當麻都

比古社二座當麻山口神社云々三代實錄〈二の卷〉に

奉^ル授^ニ大和國從五位下當麻山口神正五位下^ニまた
「三の卷」遣^テ使^ヲ諸社^ニ奉^ル神寶幣帛^ヲ云々從五位下守圖書
頭當麻真人清雄為^ス當麻社使^ト云々今昔物語「旧本十一
の卷第卅一語」に大和ノ國葛木ノ下ノ郡ノ當麻ノ郷云
云拾芥抄「下本卷」諸寺部に當麻大和^ハ右大臣豐成公^也「五九才
始^ム本願曼陀羅云々本居氏「宣長」曰「古事記傳卅八」當麻路は
河内の石川郡より大和の葛下の郡へ出る山路
にして二上山の南に在て今の世に竹内越とい
ふ是なり云々此外所見おほかれとさまてはこ
ちたければ引出ず

第十六さいでしまく入道

○源平盛衰記「卅三の卷」落書に「赤さいで白たなごひ
にとりかへてかしらにしまく小入道^{コニラダウ}これ記文^ニ
云^フ平家西国へ落下^{チリ}給^リテ後ハ世ノ騷^{サワキ}ニ引^レテ資
財雜具東西ニ運^ビ隱^レシ京白川ニモテ吟^ニケレハ」五九ウ
引^{ヒキ}失^{スル}者モ多ク深キ井ノ中ニ入^レ穴ヲ掘^リテ埋^メナ
ドセシカバ打破^{ヤブ}朽損^{クソン}ジテ失^シバカリ也サスガ
殘物^{モノ}モ有^リシゾカシ木曾五万余騎ヲ引^リ卒^シテ上
洛^シテ武士京中ニ充^ミ滿^ルテ家々ニ乱^レ入門^リニハ白
旗ヲ打^テ立^テ家主ヲ追^ツ出^シシ財寶ヲ追^ツ捕^フス云々狼
藉^{ナラ}不^レ斜^ラ殆^{ント}人倫ノ所為トモ不^レ覺遙^ニ替^カ劣^{オトリ}シタル源

氏也トゾ沙汰シケル何者ガ所為ニテカ有ケン
院御所法住寺殿ノ四足ノ門ニ札ニ書テ立タリ
ケリト云々與清日赤さいでは赤き布の切にて
平氏の赤旗にたとへたる也さいでは師説へ村田春海「六〇才
翁」に節用集へ左部」に割出布切也とあれどこれ割袴
にて左支の支を音便に以といひ多倍を約て旦
といひたる也といはれしがよし青和幣自和幣
などの旦におなじければ也袴は絹布の總名に
て細く織たるを和妙荒く織たるを荒妙といへ
りこれらのコトは別處にいふべし後撰集へ秋下」詞書
に紅葉と色こきさいでとを女のもとにつかは
して云々またへ哀傷」法皇の御ぶくなりける時に
ひいろのさいでにかきて人におくり侍ける云
云枕草紙へ春曙抄二の巻」過にし方悲しき物の段にひゞ」六〇ウ
なあそびのてうどふたあゐえびぞめなどのさ
いでのおしへされてさうしのなかにありける
を見つけたる云々またへ春曙抄五の巻」なまめかしき物
の段に殿守司などの色々のさいでへ印本作さいく「水戸本作三
さいて」をものいみのやうにてさいしきつけたる
などもめづらしく見ゆと云々宇治拾遺物語へ四の
巻」佐渡國に有「金條に袖うつしにくろばみたる

さいでにつゝみたる物をとらせと云々またへ十三
の巻〳唐人の女羊ヒツジに生れたる条にうせにしむすめ
青き衣をきて白きさいでしてかしらをつゝみ」六一才
と云々など物に見え大蔵卿〳行宗〳集に保延五年
五月三日禁中にて縁よりおちて侍しに成通中
納言もとより〳をさなはやなくいへのさいてら
うにしりてころもにかくときくはまことかとも
よめり此歌いと〳〳心得がたし又小笠原光清弓
之紀岡本記などにつるさいてありこは弓の絃
輪にまく絹にて今ツルキヌといふ物なるよし
伊勢氏〳貞丈〳赤鳥隨筆（マ）にいへり頭カシラにしまくは
頭カウベに纏マツルことにてしはしすゑしありくなどのし
におなしく為の字義也洛陽田樂記に後卷シマキとあ
るは田樂の後に立て行人の事にて今俗に踊屋臺ヲトリヤダイの助人スケビトなどいふ者にて
為纏シマキとはおなしからず」六一ウ

第十七うらわかみ

○萬葉集〳四の巻〳の大伴家持歌に〳浦若ウラワカ見花咲難寸梅ハナサキガタキウメ
乎殖ウツク而人之事重三念オホヒソノワカ曾吾為類此歌夫木抄〳三の巻〳

春部〳三〳にも載たり萬葉集〳卷の八〳の丹生女王旋頭歌ノセドウカ
に〳高圓タカマ之秋野上乃瞿麦之花下アキノウヘノナデシコノハナウラ壮香見人之挿ツカミヒトノカサ
頭シナデシコノハナ瞿麦之花同集〳十の巻〳の柿本人麿集歌に〳夕去野邊ユフサレバヌベ

秋芽^{アキハ}子^コ末^{マツ}君^{ミツ} 露^{ニシ} 枯^{アキマナ}金待^{カネマツ}難^{ガタシ}こは古今六帖へ第六へ雑思部

に下句霜にかれかね君まちなねつと有伊勢物語

語へ四十八段へに昔男いもうとのいとをかしけなるが

老ひきけるを見をりてうらわかみねよけに六二才

見ゆる若草の人の陸ばん事をしぞ思ふ此を古

今六帖へ第六へ春の草部新千載集へ戀一へなどに在原業平

の題とせり家集には見えず曾根好忠家集にへお

ほあらしの小笹が原や夏を涼みはたまく葛は

うらわかみかも後拾遺へ春下へに三月はかり野の草

をよみ侍りける藤原義孝へ野辺見れば弥生の

月のはつるまでまたうらわかきさいたづまか

な大和物語へ上巻へに忠岑かむすめありと聞てある人

なんえんといひけるをいとよき事也といひけ

りをとこのもとよりかのたのめたまひし事こ六二ウ

の比のほとにとなんいへりけるかへりことにへわ

かやとの一本薄うらわかみむすひ時にはまた

しかりけりとなんよみたりけるまことにいとち

さきむすめになん有ける云々風雅集へ春上へ崇徳院

御歌へ春くれば雪けの沢に袖たれてまたうら

わかきわかなをそつむ新續古今集へ春上へ前中納言

雅孝歌へもえ出て烟みしかき初草のまたうらわか

かき野邊の色かな夫木抄へ春一〽若菜部に後徳大寺
左大臣へうらわかみつめどたまらぬゑぐのは

をかたみにのみもおほせつるかな同抄へ春二〽若草」六三才
部に従二位忠定卿へ見たせは春は難波のう

らわかみあしの軒葉の浅みどりなる同抄へ春三〽春
駒部大藏卿有家へかすみゆく難波のあしのう

らわかみ汀の駒も春をしるらし此は建保名所
百首の題也同抄へ春五〽雉部に忠度朝臣へさいたつ

またうらわかきみよしのゝ霞かくれにきゝ
すなく也此歌は家集または万代集(ママ)に出た

り夫木抄へ夏一〽葵部に大納言師頼卿へ日かけ山生
るあふひのうらわかみいかなる神のしるしな

るらん此は堀川百首の歌なり夫木抄へ秋五〽葛部二」六三ウ
条天皇太后宮摂津へたまさかにあふ坂山のま

くす原またうらわかしうらみはてじを同抄へ雑四〽
野部源頼綱朝臣へさいたづまうらわかゝりし

しめし野のしのゝをすゝきほに出にけり同抄
へ雑七〽浦部前中納言定家卿へ春の色は今日こそみ

つのうらわかみあしの若葉をあらふ白波此題
は建保名所百首難波津の題也新勅撰集へ恋四〽民部

卿成範へ思ひきやまたうらわかき初草の秋を

もまたでかれん物とは玉葉集〈春上〉常盤井入道前

太政大臣へ春日野にまたうらわかきさいたつ」六四才

ま妻こかるともいふ人やなき長方卿集にへ武

蔵野はすくろか中の下わらひまたうらわかし

紫の塵此題夫木抄〈春三〉早蕨部にも見ゆ右の題ど

もをかうがへ渡すに末君^{ウラワカ}みにて草木の末葉の

若きにいふよしの舊説ども一わたりはさもと

聞ゆ歌林樸櫟拾遺にウラハ末ノ詞ナリウラワ

カミ藤ノウラハナド云云契沖阿闍梨か代匠

記四の下巻にうらは上なり末なり若見は末葉

などの若きをいふ云々又云源氏に藤のうら葉

弓のうら筈と用云々谷川氏か倭訓栞〈四の巻〉の字部」六四ウ

にうらわかみ弱草^{ワカクサ}により春の草の葉末わか

わかしきをいふ也云々また万葉^{マンヤ}〈七の巻〉詠^{ヨミ}河歌に

波^ハ祢^ネ蘊^{カヅライ}今^イ為^{イモ}妹^{イモ}乎^フ浦^{ウラ}若^{ワカ}三^ミ去^サ来^イ率^イ去^サ河^{カハ}之^ノ音^{オト}之^ノ清^{サヤ}左^サ

同集へ十一の巻寄物陳思歌に⁵⁰波祢蘊今為妹之浦若咲

見慍見著而四劔解此歌古今六帖〈第二〉人部袖中抄

〈廿の巻〉夫木抄〈雜十〉蘊部には詞を誤て載たり同集へ十四

の巻未勘國譬喩歌にへ乎佐刀奈流波奈多知波奈

乎比伎余知氏乎良無登頂礼抒宇良和可美許曾

蜻蛉日記〈中巻〉にかうらんにおしかゝりてとばか

りまぼりゐたればかたきしに草の中にそよ／＼」六五才

しらしたるものあやしきこゑするをこはなに

ぞととひたれば鹿のはふなりといふなとかれ

いのこゑにはなかなざらんと思ふほとにさしは

なれたる谷のかたよりいとうらわかきこゑに

はるかにながめなきたなりきく心ち空也とい

へはおろか也云々続千載へ春上後京極摂政へ春日

の草のはつかに雪消てまたうらわかき鶯の

こゑ櫻井基輔家集へ上巻にへ時鳥またうらわかき

初こゑはまたさとなれぬしとぞきく為尹

千首へはつ草のまたうらわかきこえけり野」六五ウ

上のかたの鶯のこゑ拾遺愚草員外へ上巻にへ過が

てにつめとたまらぬなつなかなうらわかな

く鶯のこゑ右の歌詞ともによればたゞわかき
(マ) の 卷

ことにいふともきこゆ契沖法師が勢語臆断へ

に末の字にあらずたゞ若きことなるよしいひ賀
ヤツラ

茂翁萬葉考へ十一の巻の考へにはうらはやをら也弱にて

宇良々々と照れる春日といふも弱ら／＼の心に

てうら若みといふに均し云々與清曰うらわか

みは葉末の稚にいふとも又たゞ若きにいふと

も先達の説なれとくはしからすこは万葉八の」六六才

卷丹生女王の旋頭歌に于壮香見と有を活字本
には丁壮香見異本には下壮香見なと書たりこ
は下壮^{ウラワカ}香見^ミと有が正しくて心をも表裏の裏を
もウラといへは表はさしもあらねと下はいと
若く^{ウラワカ}き貞^{ワカ}を底若^{シタ}さにとはいへる也されは葉末
にも限らず底^{シタ}に若^{ワカ}き貞^{フクミ}を含たる物にいふ詞也
けり

第十八答於屋代弘賢之問

○大あらき万葉三に大皇^{オホヲミ}之命^{ノミコト}大荒城^{オホアラキ}乃時^{ノトキ}余波^{ニハ}不^{アラ}
有跡^{ネドクモカクレマス}雲隱座^スこの荒城^{アラキ}は荒籬^{アラガキ}の略語^{モガリ}にて殯^{ナホ}をい」六六ウ
へりと云説さもあるべし同七に如是^{カクシ}為^ニ而也^{ナホ}尚^{ナホ}
哉將^{ヤオイナム}老三^{ミユキフル}雪零^{オホアラキ}大荒木^{ノシノ}野之^ニ小竹^{アラナク}余不^ニ有^{ナホ}九二兼盛
集に⁵¹君が代をまちしもしるし大あらきの里
のさかえを見るがたのしき曾丹集に⁵²おほあ
らきの小笹が原や夏を浅みはたまく葛はうら
わかみかも夫木抄⁵³へ雜四⁵⁴に長能⁵⁵へ大あらきのとほ
野の外にすむ人を見すて⁵⁶ゆけば袖ぞつゆけ
きこれらは地名と聞ゆれば神名帳の⁵⁷大和⁵⁸宇智
郡⁵⁹荒木神社ある所なるべし⁶⁰古今⁶¹雜上⁶²に⁶³おほ
あらきの杜の下草おいぬれば駒もいさめず⁶⁴か⁶⁵」六七オ
る人もなし後撰雜二忠岑⁶⁶へおほあらきの杜の

草とやなりにけんかりにだに來てとふ人のなき同躬恒へ人につくたよりだになし大あらしの杜の下なる草の身なれば拾遺夏忠岑へ大あらしの杜の下草しけりあひてふかくも夏の成にけるかな同雜春躬恒へいたつらにおいぬべく也⁵⁴あおほあらしの杜の下なる草葉ならねと六

帖二にへおほき鷹のいまとしなれば大あらしの

杜の下草人もかりけり此哥貫之集三に初句お

ぼつかたとありこれらの下草をよみ合せたる」六七ウ

は地名にあらず大なる荒木の立る杜也曾丹集

十二月中の哥にへおほ荒木のおほくの枝もな

びくまで夜半にさびしき冬の夜の風万葉十一

に如是為哉^{カクシテヤナホヤナリナムオホアラキノウキタノモリノシメ}猶八成牛鳴大荒木の浮田之杜之標

余不有^{ニアラナクニ}余といふも浮田の杜に大なる荒木立れ

ばしかよめる也されど此万葉十一の哥は七の

巻の哥の誤にても有べし曾丹集四月中の哥に

へ大あらしの下草までに風ふけばなびきて神を

まつりあへるかもと有は賀茂の社をいふにや

ともおほゆおほあらしかく三種^{ミクサ}に別れたれば」六八オ

思ひわくべし又曾丹集にへよそに見しおもあ

らの駒も草なれてなつくばかりに野は成にけ

り此哥夫木抄雜七には二の句おほあらしの駒
とありさては大荒木オホアラキの木間コマとつゝけし序哥に
て駒といはん料に縁語もていひながしたる也
因に云右に引出し曾丹集十二月中の哥の夜半
にさひしき冬の夜の風とあるは夜と云詞二ツあ
りて聞ぐるしなともいふべけれどさにあらず

まづ夜半と云詞賀茂翁の夜間の義といはれし
は頑也カタクナこはたゝ夜の事にも夜深の事にもいふ」六八ウ
に⁵⁵三更と書たるをへ七の卷八の卷九の卷十の卷十九の卷へヨハとも

ヨナカともヨクダチともよめり古今雜下に

へ風ふけばおきつしら浪たつた山夜半にや君が

ひとりこゆらん左注に夜コトふくるまで琴をかき

ならしつゝ云々古今六帖五にへ玉のをのた

えてみじかき夏の夜は夜半になるまでまつ人

のこぬ續千載夏寂蓮へほとゝぎすあり明の月

の入がて⁵⁶に山のはいつる夜半のへこゑこれら

はみな夜深ヨシナの事にて曾丹の夜半にさびしきと

いへるも夜ふけにさひしきにて同義なれば妨サマタケ」六九オ

なし

○ふし原しは原猿丸大夫集にへしなかどり稻名
のふし原青山にならん時にを色はかはらん此

哥によりて思ふにふし原は木立の青葉にならぬ間をいへるにやふしつけの木も葉なき柴を水中に漬たる也さればしば原は茂葉原の義にて葉のあるにいひふし原は葉なき枝のさまをいへる也ふしは節にて葉のちりし後は木節のあらはに見ゆるよりいへるなるべし和名抄、木具部に四聲字苑云節草木擁腫処也和名布之今」六九ウ按從^フ竹者竹節也從^レ草者草木節也見^ニ玉篇^一とあり神代紀に蒼柴籬といへるは生柴籬にて今の世にいふ生垣也是も葉のなきほどはふし垣といひ葉あるをりは青柴垣といへりと見ゆ後世しば垣といふは葉のある枝もてかこへば也ふししばといふも葉のなき柴なるをしば⁵⁸をそへて重言^{カサネイヒ}しにや尚可^レ考

○とわたるとわたるといふ詞は門渡るにいへると飛渡るとたゞ渡ることにいへるとの三義あり

古今雜上に「わかうへに露ぞおくなる天の川」七〇オとわたる舟のかいのしづくか此哥伊勢物語にも見ゆこは川門を渡るよし也新勅撰雜二前関白「河浪をいかゞはからん舟人のとわたる梶の音はたえねど是もおなし飛渡るよしによめ

るは相如家集に^(ママ) かげろふの水にとわたる螢

よりもはかなくみしは夢かうつゝか拾遺愚草

中にゝはまびさしなけのかたみか友千鳥とわ

たり過る沖の小島に同下に^(ママ) 59 あまつ風初雪し

ろしかさゝぎのとわたる橋の有明の空月清集

下にゝをちかたの浦人今やねさめしてとわた」七〇ウ

る千鳥近く鳴くらん續後拾遺冬照慶門院一条

ゝさえまさるさほの河原の月影にとわたる千

鳥聲ぞふけぬるこれら也又鳴わたることのみに

いへるも有されど渡の誤なるべし壬二集中に

ゝ住吉の松やつれなき夕しくれとわたりかへ

る淡路しま山續古今秋上為家ゝ見るまゝに秋

風さむし天の原とわたる月の夜ぞふけにける

玉葉雜二万里小路前右大臣ゝ沖つ風更行空に

あかしがたとわたる月の影のさやけさこの外

にもおほかれどわつらはしければ引出ず」七一オ

○⁶⁰けこのみわもり散木集にゝ⁶¹なかれつるけこの

みわもりかずそひてさや田の早苗とりもやら

れず按になかれつるは酒宴の席にて^{サカヅキ}盃の廻流^{メクリナガル}

るゝ貞也^{サマ}けこのみわもりは食簞^ケの酒盛^{ミヅモリ}にてけ

こ⁶²はもと強飯^{コハ}を筥^ハにもりたるを後に比女飯^{メイ}も

る椀の名にもいひ及ぼせる也伊勢物語にけご
のうつはもの⁶³と有みわ⁶⁴は酒をいへり飯椀に酒
を盛れるをあまた呑酔たる貞也さや田は遠江
國佐益郡の田也こは田夫か酒宴の席にて飯椀
にてあまた酒を吞多ひ苗もとられぬまでにな」七一ウ
れるよし也

第十九答於盤瀬醒之問

○足袋々々宗五大草子上卷に足袋の事殿中へ

は御免候はではえはき候はず候御免の時は必
御足袋を一足被下候又入道同朋は御免の沙汰
なくはき候人の内衆も主人の御免候へばはか
れ候いかさま無紋の皮ふすべ皮をば不^レ可^レ用出

陳の時はふすべ皮たるべし云々和名抄履襪部

に覃皮履唐令云諸鳥履並^ニクロキイロ^ハカサナガハ^{ソコ也}重皮底履覃皮

庭云々和名与^{履同}今按野人以^ニ鹿皮^一為^ニ半靴^一名曰^ニ三七二才

多鼻^宜用^ニ此覃皮^{二字}乎云々重之集上に春くら

うどたびといふくつ⁶⁶を花につけて得させたる

へあし引の山の櫻も見にゆかじこのたびえたる

くつのをしさにたと見え⁶⁷中山傳信録日本風土

記などにも載たり古は皮足袋のみなりしに寛

永の比より草綿天下に遍くなりて草綿足袋の

製おこりきて苧^ワざし木綿^{モメン}ざしは四谷^{ヨツヤ}にて製^{ツク}る
を四谷指^{ヨツヤザシ}と称し苧指^{ワザシ}は⁶⁸傾城^{ケイセイ}窪指^{クボザシ}とも又は鷹匠^{タカジャウ}
足袋^{タビ}とも称して賞観^{モテハヤ}せり又甲掛^{カフカケ}足袋^{タビ}といふも
あり此三種をすべてわらぢがけと名づく女子^{メノコ}」七二ウ
は絹^{キヌ}の足袋^{タビ}をも用ふみな近世の製作也

○金打^{キンチャウ}の誓言^{セイゴン}俗に誓を立る時にキンチャウとて
男子は刀劍などを打合せ女子は鏡などを打合
するはもと或は猪^{ブノ}を斬て若違^{ワジ}變せば此猪の如
からんといひ或は刀を折^リ矢を折て變約せば我
身もかゝらんと誓ひ女子は鏡を破^{ワリ}てたとへに
せしを真言家⁶⁹に金丁^{キンチャウ}の法とて守覺法親王の左
記にくはしく記されし事あるにとり合せてキ
ンチャウとは呼^{ヨベ}る也金打と書べきを省^{ハブキ}て金丁
と書は⁷⁰古實也とぞ」七三オ

○馬鹿^{バカ}者^{モノ}々々といふ語太平記へ十六へ本間孫四郎遠
矢の条に如何ナル推参ノ馬鹿者ニカアリケン
云々同書へ廿三へ土岐頼遠⁶⁸参合^{セリレ}御幸^ニ致^ス狼藉^ヲ一条に如何
ナル馬鹿者ゾ一々ニ奴原^{ヤハラ}臺^{ヒキ}目^メ負^{オフ}セテクレヨト
鬪^{バシ}リ云々など見え節用集にも載^{ノセ}て破家^{バカ}とも書
たるはいづれも借字也こを馬鹿の字に泥^{ナヅミ}て趙
高^バが故事に引あてし説はいみじきひがこと也馬

鹿は煩計ワザの通音にて源氏明石へ湖月抄四十三丁オへに入道
が事をいへるにいとゞぼけられてひるは日ひ
とりいをのみねくだし71夜はすくよかにおきゐ」七三ウ
てづのゆくへもしらずなりにけりと手をお
しすりてあふぎあたりとあり此外物語書にぼ
けくなども書たる挙るに違イトマなし

○天守城の天守は近江安土城に起れるよしいへ
るはひが事也細川両家記上巻に摂津國伊丹城
の天守にて腹切し事見え勢州四家記にも出て
安土城よりもはやくありし製也

○繪馬本朝文粹十三の卷大江匡衡ノ北野天神ニル供御
弊并種々物ヲ一文に色紙繪馬三疋云々此文朝野群
載二の巻にも載す法華驗記下巻紀伊國美奈倍ノ七四オ
道祖神の条に沙門恠念巡リ見ル樹下ニ有リ道祖神像ノ朽クチ
故逕ヲテヲ多年歳ヲ雖有ニ男形ノ無ニ有ニ女形ノ前有ニ板繪馬ノ前足
破損沙門見ニ了リテ繪馬足損スルヲ以テ糸綴補置ヒキ本所ニ畢ヌ云々
舊本今昔物語十三の卷第卅四語に道祖神ノ形
チ造リタル有リ其形旧ノ朽テ多ノ年ヲ経タリト
見ユ男ノ形ノミ有テ女ノ形ハ无シ前ニ板ニ書
タル繪馬有リ足ノ所破レタリ道公是ヲ見テ夜
ルハ此道祖ノ去ケル也ケリト思フニ弥ヨ奇異

ニ思テ其繪馬ノ足ノ所ノ破タルヲ糸ヲ以テ綴
テ本ノ如ク置ツト云々此説元亨釋書九の巻道」七四ウ
公傳にも見ゆ宣胤卿記、永正十七年十一月九日
の条に明日多武峰社遷宮、閔白御使、衛門佐、八十才、宣
綱云々宣秀相伴下繪馬二枚進云々など所見枚
挙しかたし続日本紀神護景雲三年二月乙卯の
条に伊勢太神宮の馬形見え雄略九年紀新撰姓
氏錄左京皇別下日本紀竟宴歌などに誉田陵の
土馬もありて生馬の代に土馬木馬繪馬とな
りしことといとはやくよりのわざ也太平記廿九阿
保秋山河原軍の条に其靈仏靈社ノ御手向扇
團扇ノバサラ繪ニモ阿保秋山が河原軍トテ書」七五オ
セヌ人ハナシ云々といへる靈社の御手向も繪
馬の事にてそは必馬に限らず他形の繪を書いて
奉れるをも繪馬とはよべる也神社啓蒙或問南
嶺遺稿一の巻草廬漫筆神道名目類聚抄倭訓栞
などにも繪馬の事あり南嶺遺稿に園記といふ
ものを引て建曆年中伊豆の三島の社へ八幡太
郎陸奥軍の圖ありといへるはうけがたし園記
といふは桂秋齋か例の偽造の書名なるべしか
ら書にも唐鄭還が古傳異に王昌齡馬當山謁、廟

乃命^{シテ}使^シ賚^ニ酒脯紙馬^ニ獻^ス于大王^ニ。また丹鉛錄に呉^ノ泰^ノ「七五ウ
伯^ノ祠^ヲ在^リ閭門^ノ之東^ニ。每^ニ春秋^ニ市人相率^テ牲^ヲ禮^ス多^シ善馬^ニ採^ル
輿^{シテ}美女^ニ以^テ獻^ス之^ヲなど有

○六十六部回國の經聖新撰和漢合圖承平二年の

段に頼朝房納^ム法花^ヲ於^テ大社^ニ。六十六部始^メ云^{ハク}桂川
地蔵記上卷に或有^リ六十六部回國之經聖負^{ヘル}笈^ヲ云

云奇異雜談集一の卷人の面に目鼻なくして口

頂の上にありてものをくふ事の条に津の國の

聖道一人へ名藤坊へ九世戸さんけいのついでに予が

居所にきたりて数日逗留の時かたりていはく

津の國に一人の聖道あり日本六十六ヶ國を修^ル七六才

行するに國ごとに十月廿日逗留してその國中の

名所旧跡大社驗佛残りなく一覽をとげてかへ

る也云々妙法寺記に彌勒二年丁卯云々六十六

部ノ写經供養云々など見え塩尻五の卷にも六

十六部廻國順礼の事あり尚可考

○木から落た猿俗語に便なくなりたるを木から

落た猿のやうといふは源平盛衰記廿四の卷へ十一

丁ウへに木ヲ離レタル猿ノ迎ヤ儲セヨトテ云々文

選西都賦に猿狢失^ル木云々などあるにおとれり

と見ゆ」七六ウ

第二十答椿仲輔之問

○比滿沙伎理^{ヒマサキリ}梁天武紀四年四月庚寅詔に四月朔

以後九月三十日以前莫^シ置^{コト}比滿沙伎理^{ヒマサキリ}梁^リとある

は三代實錄類聚三代格などに載^モたる元慶六年

六月三日の官符に毒流^{ドクナカシ}を禁^{イマシメ}られしにおなじく

河中小の魚虫ことく死せん事を憐^{アハレミ}玉ひての

わざ也比滿を水戸本の書紀また釋日本紀など

には比彌に作りたれど通音なればいつれにて

もすべし谷川土清が通證に比滿沙伎理者^ハ遮^{サエキル}レ隙^{ヒマ}

之義也荀子註石絶^ノ水為^ス梁^ト所^ニ以^也取^ル魚也搜神後記^ニ七七オ

所謂蟹断亦此意^也唐書咸亨中禁^ス作^テ簾捕^{コト}魚^ヲといへ

るにて其義知べし隙^{ヒマ}もらさじと魚を遮^{サヘトム}留^ムる梁^{ヤナ}

を制^{トメ}られし也今河湖中に立て魚海苔など取料

の竹木をヒゞといふも比滿比弥の名に据れる

にや曾丹集にえりさすとよみたるを言塵集^ニひ

び木のよし注したり

○都婆波山^{ツバヤマ}都婆波小都婆延喜式曰時祭式⁷³造酒

式などに都婆波山^{ツバヤマ}都婆波小都婆波^{ツバハ}あり都婆波

は空瓮^{ウツボ}にてウツボ^ハ74のウ⁷⁵ヲ省^{ハブキ}きホとへをハ⁷⁶に

通はしたる語とおほゆそは瓮都婆波^{ツキ}匱短女杯^{ハニサツヒキメツキ}「七七ウ

蓋^{ツキ}など並^{ナラベテ}挙^グたるにても知べし其形今は知へか

らねど清濁酒を納^イもし煖^{アタメ}もする器と見ゆ^ヘ盆^ハは
いと深からぬにいひ都婆波^{ツバ}は深く殊^{コト}に中の空^{ウツホ}
なるにいひ^{ヘニサフ}匣^ハは柄有物^{エモノ}にいへるにや短女杯^{ヒキメツキ}と
77 盞^{サン}とは酒を酌^{サグ}器也^{モノ}さて山都婆波^{ヤマツバ}とある山は
大の字の誤にて大都婆波^{オホツバ}なるべしそは小都婆
波^{ムカ}に對^{ムカヘ}たる名なれば也儀式には參河國の産物
のよし見ゆ

○等呂須伎延喜^{トロボスキニギ}大嘗會式造酒式などに等呂須岐^{トロボスキ}

見え儀式に參河國^{トロボ}等呂須伎^{トロボスキ}へ造酒式にも參河國所造^{トロボ}等呂須岐^{トロボスキ}とあ^ト「七八才
り」あり匡房卿記^ト天仁元年記にも造酒司所^ト供等^ト

呂須岐^{ロボスキ}見えて酒五升納器也^ト名義⁷⁶和名抄に參河
國設樂郡設樂^ト和名之多良^{シタラ}とあればシタラ杯^ノ

シ⁷⁹を省^{ハブ}きたラ⁸⁰をトロ⁸¹と通はしいへりと見ゆ今

參遠兩國の境志^シ等呂^{トロボ}といふ處^トへ今の荒井の邊^トにて造る

焼物をシトロ焼⁸²といふも等呂須伎^{トロボスキ}の遺風なる

べし

○下総國豐田郡和名抄に下総國管^ト十一葛鋸^トへ加止志加^ト

千葉^トへ知波^ト印幡^ト匝瑳^ト海上^トへ宇奈加美^ト香取^トへ加止里^ト埴⁸³生^トへ波^ト尔布^ト相

馬^トへ佐^ト宇^ト万^ト猿島^トへ佐^ト之^ト万^ト結城^トへ由^ト不岐^ト豐田^トへ止^ト与^ト太^トとあり民部^ト七八ウ

式^ト上^トまたおなし頭書^トに延喜四年十二月十日改^ニ

岡田郡^ト為^ス豐田郡^トと見ゆ神名式^ト上に下総國岡田

郡桑原神社といへるは改ざる已前の名をしる
せし也拾芥抄^下総国十一郡とて豊田郡の下に
元岡田延喜廿年改^上豊田^トとしるし別に千田郡を

加^上たり十一は十二の誤千田は岡田の誤なるべ
くおもふよしは古本^上節用集に大管十二郡とし
岡田を加^上たれば也されば上古岡田郡といひし
を延喜年中^上延喜式頭⁸⁴には四年とし拾芥抄には廿年とす^上豊田に改め
鎌倉の末室町の始などに二郡に分て十二郡と^上七九才
せられし来べしまた吾妻鏡によれば葛鋤郡を
分^{ワケ}て葛西葛東とせられし事もありと見ゆ

第廿一くがにあがれるいを

○阿佛尼十六夜日記^上長歌に^上須磨と明石のつゞ
きなるほそ川山の谷川にわづかにいのちかけ
ひとてつたひし水のみなかみもせきとめられ
ていまはたゞくがにあがれるいのごとかちを
たえたる舟に^上てよる方もなくわびはつる子
を思ふとてよるのつるなく^上都出しかど云⁸⁵
陸にあがれる魚とは金光明最勝王經^上卷第十^上捨身^上七九ウ
品に大車王の第三子摩訶薩埵太子大慈悲心を
起し身は大竹林の餓虎に投與し時其母国太夫
人悲傷の事を説^上る条に爾時夫人迷問稍^上止^上頭髮

蓬乱^シ両手^モ槌^モ 宵宛^ヲ轉^シ 于地^ニ 如^ク 魚處^ル 陸^ニ 若^{カク} 生^シ 失^テ 子^ヲ 悲泣^ス
而言^{イハク} 云々^ニ と見えたる故事によれるなるべし
ま
た 莊子^ノ 外物篇^ニ に有^ニ 中道^ニ 而呼者^ニ 周顧視^{スレハ} 車轍^ノ 中有^ニ
鮒魚^ニ 焉 周問^ニ 之曰 鮒魚^ノ 来^レ 子何為^{スル} 者 耶 對曰^テ 我東海^ノ
之波臣^也 也 君豈有^ニ 斗升之水^ニ 而活^レ 我哉 周曰 諾 我且^ッ
南^ノ 遊^ニ 吳越⁸⁶ 之王^ニ 激^{シテ} 西江^ノ 之水^ヲ 而迎^{ヘン} 子可^{ナランカ} 乎 鮒魚^ノ 忿然^{トシテ} 作^{シテ}
色^ヲ 曰^ク 吾得^テ 斗升之水^ヲ 然^{シテ} 活^シ 耳 君乃言^チ 此會^ヲ 不^レ 如^ク 早索^{グメンニ} 八〇オ
我^ヲ 於^レ 枯魚^ノ 之肆^ニ 云々^ニ とも見ゆ

第廿二歌道の養子

○兼載雜談に俊成卿の嫡子に兵部卿家長といふ
人ありしかど無器用なるにより寂蓮を歌道の
養子にせられし也その後定家といふ子出来て
後寂蓮は斟酌せしなり寂蓮は俗名中務少輔定
長といへりとあり養子は神代紀^上に天照大神
の素戔鳴尊の御子を養玉ひしを始にて続日本
紀^二の卷假寧令義鮮などに見え續世継八重の
しほどの卷にはやしなひ子とあり後漢書^{順帝}「八〇ウ
紀五代史^{唐太祖}家人傳その外から書の所見も
おほかり

第廿三つくり丘

○和泉国内神名帳に大島郡從四位上造^{ツクリツカ} 岳社^{ツカ} 前あ

り按に造^{ツクリ}岳^{ツツカ}はもと作^{ツクリ}道^{ミチ}築^{ツキ}山^{ヤマ}などの意にて新に造^{ツクリ}りし丘^{ツツカ}の後に地名になりしものなるべし

第廿四野井

○神名帳に石見國安濃郡野井神社あり野井は野原の中なる井のことなるべし武蔵野の井頭^{キノカシラ}の池相模野の大沼^{オホヌマ}などの類掘^{ホリ}たる井に限らず池「八一才沼の類にても野中なるは野井といふべし野中の清水などおなし心也

第廿五哉の字

○世になま古學者だつ人かなに哉の字をかくをいみじきあやまりとおもひたるはわらふにたへぬこと也萬葉七に君^{キミ}為^{ガタ}浮沼池^{メウキヌマイケ}菱^{ヒシ}採^{トリ}我^ワ染^{ソメ}袖^{スエ}沾^シ在^{ケル}哉^{カモ}同十一に公目見^{キミガメヲミ}欲^{ホシ}是^{コノ}二夜^{フタヨ}千歲^{チトセノ}如^{ゴトモ}吾^{ワカ}戀^{コイ}哉^{カモ}また行^{ユケトモク}々不相妹^{ハハヌイモ}故^コ久方^{ヒサカタク}天^{アメノ}露^{ツユ}霜^{シロ}沾^シ在^ニ哉^{ケル}などの加毛^{カモ}は後の加奈^{カナ}におなじ又顯宗紀に美飲喫哉^{ミインキ}此^{コノ}云^{イハ}二于^{ニハ}魔羅^{マラ}你^ニ鳥^ヲ野^ヤ羅^ラ甫^フ屢^ル柯^カ佞^ネとある柯佞^{カネ}も通音にて「八一ウ加奈^{カナ}におなじければこれらによりて哉の字かかんことくるしからずと知べし

第廿六壽の假名

○須の假名に壽の字をかくは十王經に樹有^{キニ}荊棘^{オドロ}宛如^{モシ}三鋒^{サンフ}刃^ニ二鳥^{ニトリ}栖^{スツカ}掌^{サドル}一名^{ナヘ}無常鳥^{ムジョウトリ}二名^{ニナヘ}拔目鳥^{ハクメトリ}我^レ汝^{ハカ}

舊里^ニ化^{シテ}成^ラ鷗鷯^ト示^シ怪^ヲ語^ナ鳴^ク別^ト都^ト頓^ギ宜^{スト}壽^ハ此^ニ鳥^近與^ニ語^ニ云^テ祈^ニ家^命鳴^ク
我^ハ汝^カ舊^ニ里^ニ化^{シテ}成^ラ鳥^ニ鳥^ニ示^シ怪^ヲ語^ナ鳴^ク阿^ワ和^サ薩^カ加^ハ此^ニ鳥^遠與^ニ語^ニ病^来將^ニ
命^尽とあるをより所とす無常鳥は杜鵑^{ホトギス}拔目鳥は
烏^{カラス}なり此経は圓融一條などの御代に偽作せし
物にて安然和尚の抄物へ題昭袖中抄⁸⁸日蓮坊の十王讃^ハ八二才
歎抄曆應の比⁸⁹暮露々々草子源氏河海抄などに
も引用たればいと古書也またうけられぬ書な
れど大同類聚方の假名にも壽^スの字をおほく書
たり

第廿七等身の佛

○等身の佛像は榮花物語更級日記舊本今昔物語
吾妻鏡などその外古書におほく見ゆこは人の
身の丈^{タケ}にひとしく佛をつくりたることゝおもふ
べからず二中歴第三造佛歴寸法の条に頌曰丈
六尺又五三尺一揲手半周尺三佛出世^{ミタケ}長八尺^也一八二ウ
是表^{スル}佛尊軀^カ相^ヲ故一倍^ニ謂^フ之丈六^ト也為^ニ衆生悟^{ニラセ}無常^ヲ
其壽百歲五分^{ニシテ}減^ニ一分^ヲ唯八十^也也へ廿為^ニ一分^ニ八尺者佛出
世時大夫等身謂^ニ之半丈六^ト也五尺者弘法傳^ニ漢土^{ヨリ}
時人長^也也近代謂^ニ之等身^ト三尺者釈尊為^ニ瞿師羅長^ヲ
者^所現^ル身^也也一尺六寸者准^{スル}丈六^ニ也一揲者從^ニ母肘^ヲ
節^ニ異^ニ予其腕節^ニ也手半者其手之半分量^也也所謂人

在^ル母胎^ニ時^ニ至^テ于^ニ第廿七箇^ノ之七日^ニ一人相皆備^ル以^テ手掩^ヒ面^ヲ蹲^ク踞^{リテ}而坐^ル其時身^ノ長與^ニ母一揅^ニ手滿^ニ卅八箇^ノ之七日^ニ已^テ出生^ス也因^ニ養育^ニ故成^ニ八尺五寸身^ニ云々是依^ニ東山隱上人説^ニに粗注^ス之とあるに据^{ヨリ}は五尺を等身の「八三才佛像といへる也論祇經下卷金剛吉祥大成就品に復説畫像曼拏羅法取^ニ淨素氎^ニ等^ニ自身量^ニ而圖^ニ畫^ス之凡一切瑜伽中像皆自身自坐^ニ等^ニ量畫^ニ之云々西域記五の卷鞞若鞠闍國の条に伽藍東起^ニ寶臺^ニ高百餘尺中有^ニ金佛像^ニ量等^ニ王身^ニ云々など見え宗何遠が春渚紀聞五の卷撞^キ鐘畫^キ像^ヲ作^ス追薦一条には亡者の等身像を画て糊し事あり

第廿八更級日記

○菅原、孝標朝臣、女^{ムスメ}のさらしな^{ムスメ}の日記は地名のついでいとみだりなりそは女十三になるとし父「八三ウが上總介の任はてゝのほるにぐしたりしほどのことそれよりつぎゝの事をもいと年へて後しるしたなればしとけなきがもとよりの體裁なるべし中の文に二三年四五年へだてたることをしだいもなく書つゝくればやがてつゝきたちたるすぎやうさめきたれどさにはあらず年月へだゝれることなり云々又所々になりなどして

たれも見ゆることかたうあるにいとくらしい夜六
波羅にあなる甥のきたるにめつらしうおぼえ
て〱月もいで〱やみにくれたるをばすてをな」 八四〇

にとて今宵たづねきつらんとぞいはれにける
云々などあるにて後にしるせし書なること又信

濃にくだりし事などもおもふべしざるを山岡
明阿弥の校本とて安田躬絃がもたる本に古本
を引て地名のついでをたゝしたるありその古
本いとうけられぬものにて明阿弥の私に考出
し説を古本にかゝりなといとあざむきしなめ
りそは逸著聞集なども此法師自つくりて古代
めきたる奥書をそへ世人をまとはかしたる例
もあればなり余が見しは元禄十七年の刊本扶
桑拾葉集、本群書類従、本橘千蔭が校本余が家蔵
の古写本二種齋藤彦麿が家の寫本岸本由豆流
が家の写本清水濱臣がもたる難波人若山滋古
が古印本謄写の本など凡て九種也この中ひと
つも明阿弥の校本におなじきものなければい
よ〱地名の正しきはその本の正しからざること
をしりはてぬさて更級日記といへるは題号は
いとすゑに更級にくだりしよしあれば也この

作者は右大将道綱母の姪にてぎえかしこきぞ
うなればかの蜻蛉のにきにもおさく立おとる」八五才
ぬふみは作り出たなるべし

第廿九雞冠花

○多識編濕草類部に雞冠ヘ和名今按二土利トリ左加サカ久ク左サ
俗称ス計伊ケイイ土計トケト云々節用集計部草木門に雞頭花
ケイトウゲ云々節用集大全計集草木門に雞頭
花雞冠花也也有二掃帚扇面瓔珞等一皆以二其花形一名之
也云々大和本草卷七へ廿五丁オ花草類部に雞冠花々
紅白黃三色アリ品多シ鮮紅ニシテ大二重ナル者
上品ナリ錦雞頭ト云南京ノ種尤ヨシ好種ヲマ
キテモ変シテ醜クナルアリシゲクウエテ花初テ八五ウ
開ク時アシキヲハ早く拔去テ好花ヲ養フベシ
三四月根ヨリ苗ヲ生ス六月ヨリ花サキ霜後ニ
萎ム凡五箇月ノ間シボマズ百日紅山茶花海紅
ナド花久シクアリトイヘドモ花落テカハルくサ
キツバク事久シキ也一花ノ如此久シキニ堪ル
事雞冠花ニシクハナシ其葉嫩キ時可レ食性アシ
カラズ草花譜曰有二紫白同帶者一名二二色雞冠一實ヲ
マキテ遅ク生スルハ花ヨシ云々本草啓蒙十一
の卷濕草類上へ廿三丁オに雞冠ケイトウ一名洗手花

〈群芳譜〉杜若〈葯圃同春〉一朵雲〈間情偶寄〉紫冠〈蘇氏韻輯〉波羅奢〈秘傳花鏡〉八六才

俗ニケイトウト呼ブ雞頭ノ意ナルベシ然トモ此

花ハ雞ノ冠ニ似タリ雞頭ニハ似ズ唐山ニハオ

ニバスノ實ヲ雞頭ト云雞冠ニ數種アリ一種茎

短ク僅ニ五寸⁹⁰ニシテ大ナル花ヲ開テ高麗ゲイト

ウ又南京ゲイトウチヤボケイトウト云漢名壽

星雞冠〈群芳譜〉廣東雞冠〈同上〉一種花ノ形圖ニシテ末尖

レルヲヤリゲイトウ又スギナリケイトウト云

漢名掃雞冠〈花史左編〉一種花ノ形チ扁大ナルヲイサ

カゲイトウ又ヒラゲイトウト云漢名扇面雞冠

〈群芳譜〉此外ニモ種類甚多シ一種掃帚雞冠ノ形ニ八六ウ

シテ花ノ末及傍ニ細枝ヲ出シ其梢各小扇面ノ如

ナルモノ出テ多ク下垂スルヲミダレゲイトウ

又イヤウラクケイトウト云漢名瓔珞雞冠〈群芳譜〉

一種紅黃二色間リ開クモノヲサキワケゲイト

ウト云漢名二色雞冠〈花史左編〉二喬雞冠〈同上〉唐山ニハ

五色相間ルモノアリ五色雲〈間情偶寄〉トイフ云々滑

稽雜談十六の卷八月下に雞冠花春種をまく時

器に入て其器の形に花形を發すといふ未考云

云汝南圃史十の卷に雞冠花佛書名波羅奢花形

高三五尺葉似篲而尖亦可食其花扁而舒長狀類八七才

雞冠有紫白淡紅三色亦有紅白間者就中又有如
纓珞者各種形狀不一浣花雜志云清明下^シ子撒過^{シテ}
即用^レ糞澆^ル可^レ免^ニ雀啄^一子細黑藏於花中瑣碎錄云種
雞冠子立撒則株高坐撒則株低盛扇撒之則如團
扇散鬚徹之則成纓珞如欲雙色各被半邊紙麻縛
之然屢試不驗又有矮雞冠種有金陵來栽植階下
若侏儒然一名壽星雞冠此花秋⁹¹興^ニ雁來紅十樣^一錦爭
^レ奇競^レ秀極為圃中點綴唯白雞冠子主治婦人淋症
最驗云々祕傳花鏡五の巻に雞冠花一名波羅奢
隋在皆有三月生苗高者五六尺其矮種只三寸長^一八七ウ
而花可大如盤有紅紫黃白豆綠五色又有妃央二
色者又紫白粉紅三色者皆宛如雞冠之狀扇面者
惟梢間一花最大層々卷出可愛若掃帚雞冠宜高
而多頭又若纓珞花光小而雜亂如簪又有壽星雞
冠以矮為貴者雞冠似花非花開最耐久經霜始薦
俱収子種撒下則糞澆可免蟲食云々食物本草十
八濕草類二本草綱目十五へ卅九丁才^一濕草類上廣群芳
譜五十二の卷花譜などに見え詩賦などもおほ
かりまた海菜に雞冠菜あり和名抄十七海菜部
に楊氏漢語抄云雞冠菜^ハ土里佐加^{トリサカ}乃里式文用^ノ鳥^ニ八八オ
坂苔^ニ云々類聚名義抄にもトリサカノリと見ゆ

以呂波字類抄二の卷止部殖物の条に雞冠菜ト

サカノリ俗用^ニ鳥坂苔云々節用集止部に雞冠海

藻トツカサ云々宜禁本草追加にトツサカ又ム

カデノリ云々和歌食物本草上へ十三丁ウ止部にとつ

さかとよめる歌三首あり大倭本草八へ四十一丁ウ雞

冠菜和品^ハ順和名抄^ニ出タリ其形雞冠ノ如シ食フ

ベシ紅色也附^テ石生^ニ云々與清日雞冠花は多識編

にトリサカグサともケイトゲともいふよし見

えこれ今のケイトウ花也雞冠菜は海菜にて今八八ウ

唐船交易の品也伊豆海邊におほしこれトリサ

カノリともトサカノリともトツサカともいへ

り其主治禁忌は和歌食物本草によみたれは閱

て知べし雞冠花は唐の羅鄴が詩に一枝濃艷對^ニ

秋光露滴風搖向^ニ砌旁曉景乍看何處似^{カタル}謝家新染

紫羅囊なとよりして宋元明人の詩おほかり貞

和集九の卷へ卅一丁ウ草木部に真淨が矮雞冠の詩あ

り矮雞冠は今俗ナンキンケイトウとよふこれ

也又五祖及^ニ率菴が雞冠花の詩あり⁹²俳諧糸衣の

発句にけいとうの花のさかりや八九月余が八九才

雞冠花の歌君か代の秋にほひて行末も長

鳴鳥のとさか花かな⁹³谷中⁹⁴隨時苑の圃中にうゑ

たるにいとよく生しけり花もこよなくて八九

月の⁹⁵奇観也⁹⁶菜花⁹⁷苗實共に食て美味也⁹⁸牡丹芍薬

にもまさりて花寿の久きと艷色の深きとは世

に似るものなし私に花公⁹⁹と名づけたるは¹⁰⁰花王

に對し此君十八公などの称をも¹⁰¹おもひよりて

の¹⁰²わざ也¹⁰³

第三十いし／＼

○北山殿行幸記へ八丁オへに常の御所夜のおとゞの御」八九ウ

衣いし／＼の御まうけもいかめしき事どもきこ

えしかどもそれまではのぞきもまゐらせねば

云々又へ十二丁ウへ次に¹⁰⁴関白いし／＼公卿しだいにちや

くさす云々又へ十五丁オへそのうち関白いし／＼次第に

まかで玉ふ云々又へ十九丁オへ御まうけの事ども御ま

しいし／＼とけいめいし給ふ云々思ひのまゝの

日記へ十一丁オへに近比まゐらぬしよいし／＼までも

ととのへさせ玉ふ云々雲井の春へ八丁ウへにいし／＼

の人／＼云々又へ十一丁ウへいし／＼けんぞうの座にまゐ

り玉ふ云々御湯殿上記へ永禄五、五十六の条へ今日は御祈」九〇オ

禱どもあり女中の御なかへ御さかづきまゐり

てみな／＼¹⁰⁵御いし／＼と御いはひあり云々按にい

し／＼は以^イ次^ジ々^々の字音也西宮記正月部下五日

叙位議の条の裏書に四條大納言説云著議所一時
 一大臣入自南以次大臣以下入自良角但雖以次
 大臣執筆之時可入自南而納言執筆之時猶可入
 自良云々又著御前圓座之時以次大臣執筆者猶
 先著自座之後隨御氣色可著上座坎云々二水記
 大永二正二淵醉の条に下臈貫者勸盃事云々第
 一大臣之外取酌人無之坎已次之大臣只盃許坎九〇ウ
 云々などあるをかうがへ合せて知べし

(以下白紙) 九一才

1も「津島天王社 南朝系圖」の順。

2も「月草 韓藍

紅花 押赤草」挿入。

3も「著」。

4も「龍」。

5も「水まき雲」。

6も「豊」。

7も「農云」。

8も「義」。

9底本「有、もにナシ」。

10も「韓娥」。

11も「云木也」。

- 12 も「メタル」。
13 も「手向種欵」
14 も「松浦肥州」。
15 も「異本義経記」。
16 も「庄野出村」。
17 も「若宮八幡」。
18 も「くる」。
19 も「佛足」。
20 底本に朱で「わ脱力」と傍書。
21 も「頼なし」。
22 底本「称」をミセケチにして下に同字を記す。
23 も「大覚寺」。
24 も「無文元選」。
25 も「後歴元中」。
26 も「法任」。
27 も「元九」。
28 も「二廿三」。
29 底本、朱で「醍醐」と傍書。
30 も「宰」に右肩二点なし。
31 も「宰」に右肩二点なし。
32 も「し」ナシ。
33 も「の」ナシ。
34 も「非三木」。

- 35 底本、右に「均力」と朱書。
- 36 も「とかめり」。
- 37 底本、「の」を書いて朱でミセケチとする。
- 38 も「なかるれ」。
- 39 も「わとはは」。
- 40 も「よし」。
- 41 底本、「お」をミセケチとして「な」と傍書。
- 42 も「長洲村」。
- 43 も「たゞ」。
- 44 も「数種」。
- 45 も「いふ」。
- 46 も「さて當麻」。
- 47 も「大坂」。
- 48 も「則」挿入。
- 49 も「男」。
- 50 も「ゝ」あり。
- 51 も「ゝ」ナシ。空格あり。
- 52 も「又弘仁九年三月十日の大國卿沽券
に大荒木臣淨川ありこは近江國愛智郡大
國卿の沽券なれば近江にも大荒木といふ地名
ありし也」。
- 53 も「すさめず」。
- 54 も「べら也」。

55 も「万葉に」。

56 も「入がた」。

57 底本「と」をミセケチにして訂正する。

58 も「しば」に右枠線を付す。

59 も「ゝ」あり。

60 も「○」ナシ。

61 も「ゝ」ナシ。空格。

62 も「けこ」に傍枠線。

63 も「けこのうつはもの」に傍枠線。

64 も「みわ」に傍枠線。

65 底本「庭」をミセケチにして左に「底力」と朱書。

66 も「たびといふくつ」に傍枠線。

67 も「二判問答

〈群書類従四百七十二卷廿二丁右〉に白足袋事於_ハ廷尉_ル者

勿論也北面已下諸侍者可_キ淺黄_キ坎依

入_レ可_レ用哉如何可_レ依_二流例_一且又可_レ在_ル其_、

人所存に坎云々など見え。

68 も「傾城_{ケイセイ}か窪_{クボ}にて製るを」。

69 底本「家」の右に朱書で「宗力」と記す。

70 も「密宗の省字にて醍醐を西酉室生

ハ一菩薩をササなどかくたぐひ也尔雅

釈詁に丁は當也とあれば金と金を

打當る義ともいふべけれどさにはあら

でなほ打の省字なるべし」

71 も「ねくらし」。

72 も「なと奉りし」。

73 も「四時祭式」。

74 も「ウツボペ」に傍枰線。

75 も「ウ」に傍枰線。

76 も「ホ」、「ヘ」、「ハ」に傍枰線。

77 底本、ここに「と」をミセケチ。

78 も「名義は」。

79 も「シ」に枰傍線。

80 も「タラ」に枰傍線。

81 も「トロ」に傍枰線。

82 も「シトロ焼」に傍枰線。

83 も「埴」の字の土偏を虫食いの臨模とする。底本でははっきり土偏が書かれる。

84 も「頭書」。

85 も「源平盛衰記へ四十八卷一丁左」女院吉田住

居の条にも魚の陸に上ルカ如シ鳥ノ子ノ巢ヲ

離レタルヨリモ猶悲クと見ゆ」

86 底本「越」の字補入。

87 底本、フリガナの「ケケノ」のはじめの「ケ」を朱書で「イ」に訂正する。

88 もでは割注ではなく本行で記す。

89 も「比の」。

90 も「三五寸」。

91 も「秋深」。

92 も「翰林五鳳集十九卷

にも瑞戸驢雪などが雞冠花の詩を載す」。

93 も「鳥のとりさかの花」。

94 も「こは和名抄に鶏冠菜を土里佐加乃里

と訓じ或文に用_ニ鳥坂苔_一とも見え同書、

羽族體部に朱冠師說冠訓佐加ともあ

ればこれかれ通はして登里左加の花

とはよめる也一とせ別業の隨時苑」とあり。「谷中」の語はも本になし。

95 も「月のほとん」。

96 も「也ぎ」。

97 底本「菜花」をも「花葉」とする。

98 も「赤色の物は赤帶下を治し白色の物は白帶下を治して藥効あり」追加。

99 も「花侯」。

100 も「名づけて賞翫せるは」。

101 底本「此君十八公などの称をも」も本になし。

も「牡丹を花王芍藥を花相蓮を花君子梅

を花夫人などいふにむかへて」とあり。

102 も「おもひよれる」。

103 も「万葉集十一卷（四十一丁左）寄_テ物陳思_ル歌に隱庭戀而死_シ鞆_ト三苑原乃鶏冠草

花乃色二出目八方古注に類聚古集云_ニ

鴨頭草又作_ニ鶏冠草_一云_ニ依_レ此義_ニ者可_レ和_レヨム

ツキクサ
月草一坎云_ニこ_一に鶏冠草と書たるによ

りて契沖法師韓藍の花を雞冠花の事

とせるは然るべし本居宣長が十卷「五十五丁右」

の戀目之氣長有者三苑圃能辛藍花之

色出余来と同格なればこゝの雞冠草

花もカラアキノハナと訓べし韓藍は紅花

の事なるよしいへるはいかそや紅花は万

葉集中呉藍とも紅とも書てクレナキと

訓韓藍とは殊也本草和名「下卷五十四丁右」本

草外薬部に雞冠草和名加良阿為倭

名抄「十四卷」染色具部に揚氏漢語鈔云鴨

頭草「都岐久佐」辨色立成云「押赤草」などあるを考

るに都岐久佐は衣に摺付る草の総名に

て古代は藍紅花雞冠花鴨路草の類に

いひ中にも鴨路草をむねと月草といへ

りといひ押赤草は雞冠花は衣に押付

れは赤色の移りて染らるれば押赤草

ともいふなるべしさて万葉の古注に類

聚古集を引て鴨頭草又作雞冠草と

あるは鴨頭草は總名なれば雞冠草を

然もいふよし也又依此義者可和一月草一坎

といへるは鴨頭草を都岐久佐とよむ

ゑに雞冠草もしかよむへき坎と後人の

推量の説也されど月草と訓べきには

底本「みなく」の字配りが判然としない。もを参考に記す。

「に」の字、もでは虫損臨模。

あらてなほ古點のことく加良阿為と訓
 て雞冠花ケイトウの事と心得べし鴨頭草は「
 月草ツキクサとも露草ツユクサとも哥ホタルグサはよみ俗に蟹草
 波奈哉良ハナガヲともいふ草也漢名鴨路草に
 て本草綱目濕草部に載せ本草啓蒙、
 十二卷へ十一丁左に委くその形状を説たれば
 閱て知べし然て今世のケイトウ花古
 代は加良阿カラアキ為といひ總名には月草ツキクサと
 もいへり漢名は雞冠ケイコウ花ハナなり余私に花
 侯コウと称し土里佐加トリサカ乃花ノハナと哥カによめる
 も古例によりてのしわざ也鷄冠菜トリサカノリは「
 海苔にて名は似通ひたれど別物也

梅田 径

1984年生。日本学術振興会特別研究員PD。

単著『六条藤家歌学書の生成と伝流』（勉強出版、2019）。

ほんこく まつのやがいしゅう まきに
翻刻 松屋外集 卷二

令和六年三月二十七日 初版第一刷

著者 おやまだ ともきよ うめ だ けい
小山田与清著、梅田径編

発行者 梅田径

〒252-0141

神奈川県相模原市緑区

相原3-22-2

kei.umeda@gmail.com

ISBN 978-4-86795-048-7

発行所：オリンピア印刷株式会社